

頼兵を出す。此時景勝謀りて、勝頼の寵臣長坂釣閑、跡部大炊助に使者を送り
 勝頼に黄金一萬兩、寵臣に二千兩宛を與へて、加勢を乞ふ。兩寵臣勝頼を勸め
 て、政虎を放されたり。是れより諸士勝頼を恨みけるが、終に勝頼の妹聿木會
 左馬頭義昌、信長に従ひて、勝頼に叛く。勝頼これを討たんとて、軍を信州諏
 訪原に陣す、小山田左兵衛信茂も、これに従ひて、御宿監物友綱に送る。
 汗馬忽々兵革辰。東西戰鞍轟邊恨、
 世上亂逆依何起、只是黄金五百鈞、
 砂金を一朱も取らぬ我れ等さへ、薄恥をかく數に入るかな
 友綱和韻
 甲越和親堅約辰。黄金媒妁訟神恨。
 倍臣屠盡平安國。可惜家名換萬鈞。
 薄恥をかくは物かは、なべて世の寂滅するも金の諸行よ

兩寵臣、彌邪義を行ひて、武田家滅亡せり。

東照宮勝頼と大井川にて御對陣の事

天正七年九月、東照宮、勝頼と大井川のいろうにて、川を隔て、對陣しお
 はします。時に大木川上にて川に轉び落ちける。其音波に響きて、ことごとくし
 く聞えしかば、すはや勝頼夜討に寄すると、騒ぎ立ちて止らず。牧野半右衛門
 に、先陣を鎮めよと仰せられしかば、牧野馳せ行きて、何事に騒ぎ候ふや。御旗
 本も騒ぎ候ふぞ。疾く鎮まり候へ、と呼はりければ、愈亂れ立ちけり。かゝる
 處に、大久保七郎右衛門忠世馳せ來り、勝頼押し寄すべしとて、御旗本は物の具
 固め、敵を待ちかけたるに、何とて先陣の人々、斯くまで驚き狼狽へ候ふ哉、後
 日に嘲り笑はるべし。疾く鎮まり候へ、と罵りければ、是れに耻ぢしめられて
 程なく騒ぎも鎮まりけり。

一説、持船の城を攻め落させ給ひ、保ち難しとて、焚き棄てらる。此時勝頼沼津の城普請築地の上にて、此烟を見られしが、北條家の軍を後にして、九月二十日東照宮の御陣に打ち向ひ、富士川を打ち渡す。東照宮客戦は危しとや、御思慮ありけん。兵を返して、大井川の伊呂を渡らせ給ふべきに定めさせ給ひしに、俄に總軍騒ぎ立ちて鎮まらず。牧野半右衛門制止むれども、彌騒ぎしに、七郎右衛門忠世御旗本に、大提灯を高く差し揚げさせ、士を附け置きて、我が歸るまで動くべからずと云ひ含め、先陣に行きて、御旗本は二の身を討たんとて鎮まりたり。其證は、あの火の動かぬを見よ、と云ひければ、是れによりて鎮まりければ、やがて乗り歸り、先陣はよく鎮まりて、敵を待つ體なり。以後先陣の人々に笑はるべし、と云ひければ、これも亦鎮まりけると云へり。

栗田刑部幸若が舞所望の事 時田が首實檢の事

東照宮、高天神の城を圍ませ給ひ、柵を付けて固く守らせらる。城中後詰を乞へども、勝頼出でず。糧盡きけり。栗田刑部使を以て、幸若が舞を一曲所望し、是れを今生の思ひ出にせんと、申しけるを、東照宮聞し召し、優しくも云ひけるよとて、幸若に高館を舞はせらる。栗田が最愛の小姓、時田鶴千世と云ひし者に絹紙様の物を持たせ出して、幸若に贈り與ふ。其後落城の時、時田討死しけるを、首を取りたれども、女の首なるべしと、人々疑へり。東照宮聞し召され眼を開き見よ。女ならば白眼なるべし、と仰せありければ、開いて見るに黒眼あり。又幸若忠四郎も、高館を舞ひける時、見しりたりければ、時田が首に定まりけり。

岡田竹右衛門見切の事

天正八年七月、東照宮田中の城を攻めさせ給ひ、八幡山に御陣ありて、たはたら田働きあり。勝頼後卷うしろまきせんとて、甲州を打ち出づる。松平康親が士岡田竹右衛門元次、もとつぐ此頃夕立洪水あるべき時なり。大井川は、一夜に水出て涉り難し、勝頼血氣の勇將にて候へば、若し俄に押し寄せ候ふ事あらん。刈田終らば疾く川を涉りて、兵を返され然るべしと申す。東照宮尤もなりとて、川を涉り、兵をさめ給ふ。果して其夜、大雨激しく大井川水出でたり。

朝日千介西郷伊豫を討つ事

田中の城を攻めらるゝ時、西郷伊豫といふ剛の者、足輕を引き具し、度々打つて出て、寄手を破りければ、東照宮誰れかある。西郷を討つべき者は、と仰

せありけれども、答へ奉る人なし。其夜菅沼大膳が陣に、人々集まりて、此事を云ひ出したるに、菅沼が小性朝日千介こしやうすけ(後には丹後と申す)十八歳なりしが進み出で、討ち取るべしといふ。菅沼聞いて、汝寢言を云ふやと云ひしに、必定討ち取り申さんと云へば、さばかりの古兵も、軍し兼ねつる西郷なり。容易く討たん事思ひも寄らず。其處立ち去れと罵りければ、傍よりいやとよ。千介が面魂つらたましひなみ並々ならず。末頼母しき若者なりと、云ひ宥めけり。千介明日を待たれよ。西郷が首提げて参らん物を、と獨言して退きけり。かくて夜更けて菅沼が愛せし鐵砲を取り出し、曉陣屋を密に出で、岡部と藤枝の間なる竹林に隠れて居たり。夜あけて西郷馬に乗り、足輕引き具して来る。東照宮は、岡部の傍の小山に陣しておはせしが、敵又出でたと仰せありける處に、千介鐵砲を矯め据ゑ、西郷を馬より打ち落し、走り出て首を取り、駈け歸りて斯くと申す。東照宮、あはれ剛の者よ、と賞めさせ給へば、是より千介が名、高く聞えけり。

菅沼定盈膽氣附山口五郎作後藤金助討死の事

天正二年、勝頼兵を出して、菅沼新八郎定盈が新に構へたる城を攻めんとす。定盈が一族を嚮導として、不意に押し寄する。謀を知りたる者ありて告げ知らせけり。□月廿九日の曙に、定盈が士共大敵、和田嶺、本宮坂二筋に分れて、攻め來り候ふ間、疾く退かれよと云ふを聞きて、一軍もせず逃げ落ちん事、弓箭取る身の恥なりといふ。人々永祿年中、今川家より攻めし時は、西郷孫九郎元正加勢たりき。今多からぬ士卒打ち散りたれば、早く城を出て、運を開くの道こそ、然るべからんといへども、定盈兵を出して、敵の様を見せしむ。山縣が軍競ひ來る由告げけるに、定盈厠に行きて、諺をうたひて出でず。足輕の頭山口五郎作、強ひて諫めければ、厠より出で手を洗ひけるが、又湯をもて口すすぎたる體常の如し。強ひて諫むれば、南の廓より退きけるが、途中にて、我

れ等が伏所に火をかけざる事、後に敵に嘲らるべし。誰れかは歸りて、城に火をかけ、又日比愛したる鷹を携へ來るべき、と云ひもあへぬに、中山與六、十八歳なるが引き返し城に戻り、火をかけ鷹を臂にて出たりけり。定盈は宇利を経て、西郷へ赴きける。後を慕ひて、與六海倉洲まで退きけるに、與六が一族後藤金助追ひ駈け來て、汚くも敵に後を見するよ、と詞をかけたりに、與六馬引き返し、むずと組み、既に金助が首を取らんとせしに、多嶺の士數多落ち重りて終に討たれけり。山口は定盈が後殿して、主従三騎素綱瀬を渉る處に、敵追ひ來る。山口引き返して、敵あまた射伏せたれども、馬疲れければ敵は近付く。歟田村にかゝり、吉祥山に赴く。敵猶追駈け來れば、散々に射白ましけるが、馬動かざりける故乗り放ちて、歩立ちになり山にかゝる。箭二筋のみ残り。菅沼刑部鹽津傳助追詰めければ、射たれども中らず。指添を抽いて手裏劍にうつ。刑部が頭上を打ち掠りたり。山口も終に其處にて討死し、其墓今に

ありといへり。

岡崎三郎君の御事

岡崎三郎君、天正七年二股ふたまたの城にて、自殺おはしましける事は、信長より叛逆の志ありて、勝頼に内通し、二股の城へ甲斐の兵を引き入るべきとの三郎謀あり。此事は酒井左衛門尉よく存じたり、と告げ申されしより事起りて、つひに死を賜りぬ。

忠次を信長召し寄せて、三郎君の北の方より、告げ申されし十二條の悪事を擧げて、忠次に問はれしに、忠次是れより前さき、三郎君の侍女おふうと云ひし美人を、密に己れが妾とせし事によりて、三郎君憤り深かりければ、陳謝の事に及ばずといへり。

又一説に、佐久間右衛門尉信盛三河に参りけるに、東照宮御馳走ありける

が、三郎君を召され、御對面ありしに、佐久間黄なる綿帽子を被り居たるを、三郎君引き奪ひて投げ棄て、無禮なりと怒らせ給ふ。東照宮驚き思召しけるに、三郎君、我れは信長の婿にてこそあれ、と仰せられしかば、佐久間無禮を謝し申せしが、是れも信長に讒言せし故とも云へり。三郎君は勇氣逞しく、極めて物荒くおはしまして、軍に臨みて氣色けしき變り、髮毛も逆さかに立つべく見えしを、東照宮御覽じて、摩利志天の像に似たりと仰せありしとぞ。

平岩七之助親吉は、三郎君の傳もりなりしかば、臣が諫め申さざる罪を以て、死刑に行けれ、首を信長に送り、三郎君をば獄ひとやに押し籠め置いて、時を御待ちあれと申しけるを、東照宮汝が忠心は、誠にいふべき詞ことばもあらざれども、能く察せよ。武勇我れに優れりと思ふ子を殺すは、忍びざるの至りなり。汝が首を信長に送るとも、既に吾が家の長臣酒井が、信長に飽くまで悪しく云ひつると

覺えたれば、なか／＼聞き入れられじ。汝を殺さば、恥の上の恥、損の上の損
 とは是れなるべし、と仰せられけるとぞ。其後年経て、忠次目を煩ひて、久し
 く引き籠りたりしが、御前に出で、年老ひ候ひぬ子を不便にせさせ給へと申し
 けるを聞召し、信康生きて有るならば、かばかり心を勞すまじきよ、汝も子の
 不便なる事を知りたるが怪しき、と仰せられしかば、言葉なくて退出したると
 なり。又ある時。幸若大夫が満仲を舞ひたりしを、御聞きありて、満仲の舞
 は大久保は得見まじ、と仰せられしかば、忠世も引き籠りけり。これは三郎君
 を忠世に御預けありしに、定めて引具し參らせて、片陰の山林に、身をひそめ
 なんと申し召しけるに、さはなかりける故、三郎君の御事を、悔ませ給ふをり
 をり、御詞には出でざれども、事に觸れ数年の後も、愁傷の色現はれさせ給ひ
 けるとぞ。

攝津國花隈城落つる事

攝津國花隈の城は、荒木攝津守村重が一族、荒木志摩守元清籠れり。天正八年、
 信長の命にて付城を構へ、花隈の北諏訪が嶺には護國公、西の方金剛寺山には
 士大將伊木清兵衛忠次、森寺清右衛門忠勝、南の方生田の森には、護國公の嫡
 子勝九郎之助守り給ひぬ。いづれも花隈より、六七町ばかりを隔てたり。三月
 二日、城より兵を出す。勝九郎廿二歳にて、組討の功名あり。國清公（此時古
 新と申す後に三左衛門尉輝政公）十六歳にておはせしが、是れも組討にて首を
 取り給ふ。護國公敵五六人自ら討ち取り、伊木清兵衛、秋田嘉兵衛、堀與左衛門、
 芳賀五郎右衛門、石黒武左衛門、佐橋武右衛門、後藤市兵衛、波多野彌藏等、
 烈しく戦ひて追つ崩す。ある夜護國公、森寺政右衛門を呼んで、城中へ忍び入
 り、よく見來れ、と命ぜらる。森寺行く時、梶浦勘兵衛も打ち連れんとす。

森寺今夜の物見は大事なり。相俱はん事叶ふべからずと云ふ。梶浦聞いて思ひ立つたる事、空しく歸るべきや。自害するより外なし、と中々歸るべき體にあらざれば、打ち連れたり。陣と城との間に、小さき坂あり。城中より武者二人、槍を捉げ來るに出會ひ、二人とも討ちとり首をば草の中に匿し、搦手の水道より忍び入り、又水道より出で、匿し置きたる首を持ち歸り、實檢に入れ、城中の有様を申せば、護國公早や城は攻め取りたる心地するよ。如何にしてかは此功を賞すべき。但し梶浦は後で行きたるや、と問はるゝに、梶浦承りて、政右衛門に仰せられしを、物蔭にて聞き候ふと申す。護國公近習の人を退けて云ひつる事を立ち聞きし、且つ軍法を破りたる、と怒り給ふ。其時森寺、只今忝き仰せを承り候ひき。さして賞美の望み候はず。勘兵衛が咎を免させ給ひ候へかし、と申せば、護國公さて止みなんとぞ仰せける。かくて七月二日に及びて、生田の森の南へ、馬の草刈りに雑人出でけるを、城中より兵を伏せ置き

て追つ散らしけるを、生田の森の付城より是れを見て、藤九郎馬上に槍を横たへ、續け者共、とて馳せ向ふ。梶浦兵七、河崎忠三郎、大陽寺左平次、白田喜平次、日置清十郎など追ひ續き、聲をあげて切りかゝる。竹村喜左衛門、乾平右衛門、長谷川新次郎槍脇を射る。淵本彌兵衛は、四寸角の柱の一丈餘りなるを打ち振りて、敵を叩き伏せ相戦ふ。金剛寺山の伊木森寺も、大手の軍烈しきを見て、搦手より乗り取らんと押し寄する。城より野口與一兵衛といへる者、半町計り打つて出で防ぎけるが、野口も討死すれば、城際へ押し詰むる。大手の戦に、寄手多く討たれ、危かりければ、引き返さんと護國公、梶浦に詞を懸けらるれば、勘兵衛唯今あげんとせば、彌々亂れ脚になるべし、先程は、鐵砲の數少く覺えつるに、俄に増したるは、搦手より大手へ救ひ來りぬらん。政右衛門早搦手へ押し詰め、乗り込み申すべし。然るに、只今大手の味方を引き取らば、敵搦手へ廻りて、政右衛門討死すべしと申す。護國公尤もなり、疾く行

きて見來れ、と仰せられしかば、勘兵衛馳せつけて、云々の事なりといふ。政右衛門能くこそ云ひたれ。早乗り入るべし。大手を攻められ候へと云へと云ふ。勘兵衛此場を見捨て、歸らんば、口惜しけれども、使の仰せ重ければとて、駆け歸り、斯くと申せば、護國公無二無三に乗り破れ、と下知せらる。勘兵衛は城兵の必ず突て出づべき門脇に詰め寄せたり。搦手よりも、伊木森寺先を争ひ、門を破りて攻め入りたり。森寺は今年の春、案内は能く見たりし故、門を破る透間に、傍の屏を踰え、敵槍にて突きけれども、飛び込みて其まゝ討ち取りたり。梶浦が察せし如く、搦手は防ぐ兵少かりければ、攻め入りて火をかけたなり。城兵も、大手の門を押し開き切つて出る。勘兵衛待ち請けて、槍を合す。城兵爰を切り抜けん、死狂になりて戦ひけるに、寄手搦手より攻め入りたるが、敵の後へ切つてかゝりしかば、城兵濱邊をさして敗北せり。兵庫の築島に雜賀孫一郎、花隈の加勢としてありけるを、伊木森寺先陣にて押し寄せ攻め落す。此

時湊川にて、勝九郎五輪作右衛門といふ剛の者と槍を合す。森寺政右衛門も馳せ付けたれば、作右衛門引つ返して退きけるが、五輪の指物を、是れば隠れなき指物なり。兩人へ進らすよと云ひて川へ飛び込みて逃れ得たり。黒き四半に白き五輪の形を染めたるなりしとなり。信長より、勝九郎國清公に馬を進らせらる。護國公今度の軍、我が目前にて、各々功名したるなれば、明かに見届けぬ。中に就きて、梶浦が決斷、槍を合せたるよりも、忙はしき場に能くこそ察したりとて、返すく賞美ありけるとぞ。

高天神落城仁科信盛戦死の事

天正十年、勝頼の弟仁科五郎信盛、高遠の城を守る。織田信忠僧を使として勝頼の滅びん事近きにありとて、城を出でらるべし、と云ひ送りたりければ、信盛怒つて返答もせず、僧の耳鼻を削いで追ひ出す。信忠さらば攻めよとて押

し寄せて嚴しう攻むるに、城兵残り少なく討たれ、信盛、小山田備中、渡邊金太夫照、春日河内守、原隼人、今福安左衛門、諏訪莊右門已下十八人、十二間に七間の廣間に籠り、火を散らして戦ふ。信忠淺黄金蘭の母衣懸けて屏に上り梧桐の枝に取り付き、下知らせるゝを目につけ、七八度打つてかゝる。此時三十五六歳ばかりの、女房の緋威しの物の具着、眉尖刀を提げ、諏訪莊右衛門が妻なりと名乗り、七八人薙ぎ伏せて自害しけり。信盛を始めとして、死狂に切つて廻れば、攻めあぐみたる時、森武藏守長可屋根の板引き破らせ、鐵砲を打ち込みたりければ、信盛床の上にあがり、腹切つて脇を擱んで、唐紙に擱うち倒れ死す。其血痕後までありといへり。小山田已下も自害したり。信盛此時十九歳なり。忠信の取り付かれし梧桐に、槍刀の痕ひしと付きて、大廣間の天井も柱も、槍太刀の痕ありて、血に染まらぬ所なし。庭に残れる雪に血かゝりて、紫となれりとぞ。

卷之四 終

卷之五

勝頼の首穿鑿の事

勝頼てんりく天目山あめくまに落ち行く時、瀧川たきがわ一益かず攻め入りて、落人おちうどども討ち取り、勝頼の首を取りたれども、誰れといふ事を知らず。小溝こみぞの中に棄てけるに、百姓ひやくしやうは溝の前みぞのまへにて、必ず平伏し、禮をして打ち通る。如何なる故ぞと問へば、あの溝みぞの中に、屋形やかたの御首のおはしまし候ふと云ふ。さらばとて首ども取り出す。信忠勝頼の首を分ち置き、先づ瀧川義太夫を呼びて汝が取りたる首は、いつれぞと問はるゝに、是れなりとて出す。此は土屋總藏つちや昌惟まさこれが首なり。伊東伊右衛門といふ者進み出で、勝頼の首を見て、此ここそ伊右衛門が取りたると申す。證は如何にと問はるゝに、斬口きりぐちに乗つたる馬の栗毛くりげ糟毛かすげの血まじに混りて付きて候

天目山の麓、田野より鞍の四方出に付けし故なりと申す。果して詞に違はず。よりて伊東が取りたるに定まりぬ。信長勝頼の首を見て、いかに汝が父、非義不道なりし故、天の隨遁れ難く、今斯くなりぬ。信玄一度京に赴かんと志しけると聞く。汝が首を京に送り、女童に見知られよと罵り、首を東照宮の御許に送られけり。東照宮御將机におはしませしが、勝頼の首と聞き召し、將机を下りさせ給ひ、偏に若きゆゑ、思慮なく斯くならせ候ふと禮義正しく仰せあり。是を傳へ聞く甲斐信濃の士ども、徳川家に心を寄せ奉るもとなれり。又一説に、勝頼の首を、瀧川が土瀧川莊左衛門といふ使番に持たせて、信長に見せ申せば、さまざまに罵りて、杖にて二つ突きて、後足にて蹴られけり。莊左衛門是れを見て、かゝる事こそなけれ。織田家の運命、早や盡き果てなんと云ひけるを、蜂須賀阿波守至鎮の長臣、稻田修理が弟丹波瀧川が方に、信長より置かれたるが聞きけるが、果して程なく信長弒せら

れしかば、莊左衛門心ある者よとて、蜂須賀の家より捜し求めけるに、瀧川の家滅びて、後匿れ居たるを、召し出して仕へけるとなり。

秀吉勝頼の滅亡を惜まれし事

信長甲州に攻め入れし比、秀吉は筑前守とて、西國毛利家に向ひて、甲州の軍に従はず。勝頼死して甲州平均なりと云ふを聞き、秀吉大息吐いて、あたら人を殺したる事の残り多さよ。我が軍中にあるならば、強ひて諫め申して、勝頼に甲信二州を與へて、關東の先陣としたらんに、東國は平押にすべきにと繰り返し悔まれけり。

信玄の館の跡を信長公見給ひし事

勝頼亡びて後、信長信玄の館を見んとて、馬を乗り入れんとせられしに、馬

進まざりしかば引き返されけり。東照宮は程經て、甲州を治めさせ給ふ時、信玄の館の跡御覽の時、館の門外にて御馬より下りさせ給ひしとぞ。

勝頼天目山にて最後の事

勝頼滅亡、天目山にての事共、甲陽軍鑑には切死に没せられし山載せたり。甲州の士民の云ひ傳ふるとは異なり、鶴瀬も勝頼に背きしかば、天目山をさして落ち行かれしに、一揆所々より起りてければ、百姓の家に、従ひし婦人共をいれ、旁の人家に茅のありけるを運ばせて、出入る口を塞がせ、火をかけられけり。小高き所に上りて、武田の家代を持ち傳へられし楯無と云へる物の具を信勝に着せしめらる。土屋總藏肩入の役をしけり。さて勝頼薙刀を横たへ、寄り来る一揆に向はれしを、總藏屋形は新羅三郎より、二十八代弓箭の家を繼せ給ひ、今はの際に及ばせ給ふとも、一揆ばらに御首を渡し申さん事、口惜しく

候ふと諫めければ、尤もなりとて物の具脱ぎ、總藏に介錯せさせ終られしとぞ。相従へる人々、皆互に刺し違へて、勝頼の供しけり。總藏と僧の鱗岳と残り留れるが、皆事よく終りしを見届けて後、總藏自害しければ、鱗岳刀を口にくはへ、貫かれて死しけるとなり。されば後甲陽軍鑑天目山の事は、もとより彈正の筆記にあらず。後の人誤り傳へて書きたるなるべし。

禪僧廣嚴院勝頼の屍を葬る事

勝頼父子の屍、田野にあれども、信長を恐れて、慧林寺の僧を始めとして斂むる人なし。田野の西北四里ばかりに中山といふ所の洞家の禪僧廣嚴來りて勝頼夫婦、信勝已の屍を斂め葬る。其後東照宮甲州を御ささめ、一寺を建立有りて、景德院と號し、田地を寄附あり。小宮山内膳友信が弟の僧なりしを、住持の僧となしたまへり。

信忠慧林寺を焼かる事

勝頼亡びて後、武田家尊崇しける慧林寺に、前將軍義昭公の使大和淡路守、三井寺の上福院、佐々木承禎三人を匿し置きたる聞えありければ、早く出すべきと、信忠下知せらる事、三度に及べども出さず、信忠怒つて累世の且越、勝頼をば少しの間も境内に留めず。其遺骨をだに取り斂めずして、詮なき者を匿したるとて、津田次郎信治、長谷川與次郎等をして、寺を取り巻いて捜さるゝに、三人は疾く逃げ去りぬ。僧徒皆山門の樓に上りて籠りたるを、其下に燒草を積みて火をかけたれば、快川を始めとして、坐して合掌して焚け死す。其餘を喚き叫んで焼死にけるは、寶泉寺の雪峯、東光寺の藍田、長禪寺の高山等、兒童に至りて八十四人なり。

又禪僧の語り傳へしには、快川濃州に在りし時、信長招待すれども、肯は

ず。今川の家に行きて、今川家を輔佐したりければ、信長憎まれしに、甲州に往きて、慧林寺の住持たり。信玄の死を深く匿しければ、信長愈怒りて、さまざまに索り聞かせられしに、快川の方より泄らさざれば、信長怒りに堪へ兼ねられしが、武田の亡びし故、遂に焚き殺されしとなり。又其時樓下に槍先を揃へて、餘さじとしたりしに、快川弟子の南華に、法の絶えなん事口惜し、迎も、逃るべきにあらねども、樓より飛びて死に候へと云ひしかば、南華飛びたりしに、群りたる士卒の槍を作りたる者ども、槍を伏せたりしかば、南華たすかる事を得て、後豊後月溪寺にありと云へり。又續いて飛びたる者十六人ありといへども、其名傳はらずとかや。

東照宮依田信蕃を助け給ふ事

天正十年三月、東照宮江尻に御軍を出され、成瀬吉右衛門正一を以て、田中

城を守りける。依田右衛門佐信藩に降参を勧められ、武田の舊臣悉く背きて、滅亡近きにあり、疾く城を出て候へ、と仰せ送られけるに、依田従ひ奉らず。武田の長臣の書簡を得て、虚實を定むべき旨を申す。其後先年遠州二股の城にてゆかりも候へば、大久保忠世に城を渡すべしと申せしかば、東照宮尤もなりとて、穴山梅雪が書簡を送らせらる。信藩に於て、城を忠世に渡しければ、降参せば信州の本領をあて行るべき由、仰せ出されしに、依田承り、勝頼の存亡を審に承らざる間は、仰せを承り難しと申して、信州佐久郡葦田に赴かれけり。勝頼既に亡びて、信長今度勝頼に二心なき輩といふとも、武名ある者は、諸將召しかいゆべからずと下知し、猶隠れ居る者を、搜し出して死罪に行はれんとなり。東照宮この事を悼ませ給ひ、信藩を市川の御陣に召され、密旨を蒙り、主従六人遠州劍東郡二股の奥、小川といふ所に匿させ給ひけり。其餘仁徳によりて、人数多援けさせ給ひけり。

武田信綱誅戮の事

天正十年三月、武田道逆軒信綱降参しけるを、信忠森武藏守長可に下知して殺されけり。長可各務兵庫元正を使とし、武前采女を添へたり。信綱刀を膝下に置きて放たず。各務武前行き向ひて、武藏守が愛する馬の候、慰みに見給はんやと云へば、庭に出る處を、元正二尺六寸ありける雲次の刀にて一太刀斬りたりしに、信綱小脇指を抽く處を、采女續いて切り伏せたり。小性河野といふ者信綱の刀を持ち居たりしが、即ち抽いて采女を切る。兩士遂に河野をも討ちとめたり。元正槍を合せ、首を取る事廿一。ことし高遠の城攻めにも、さまざまよりうかいひ見て、群りたる真中へ飛び入り倒れたるが、起きあがりて、散々に切り合ひ首を取りけるが、鶏尾の棒の指物さして、四邊を拂ふ有様を信忠見て、誰れと問ふ。長可わが家の士、各務兵庫と申す者なりと云へば、誠に今日

の見物なりと云はれしとぞ。

戸田半右衛門山口小辨佐々清藏功名の事

高遠の城にて、戸田半右衛門重政一番に駈け入る時、赤母衣に金の辰竹の出し戸張隠のす戸、衝木に當て通り得ず。尻居に倒るゝ其間に、信忠の小性山口小辨、佐々清藏踏み越えて駈け入りたり。戸田後に人に語りて、我れ等が如き武功にては、母衣指物の門木戸に闕ゆべきと、心付く事はなき物なり、敵を見て、かゝる時外の志はなきものなり、若し勝れたる武勇の人は、別の事と云ひけり。半右衛門後武藏守と稱し、關原にて討死なり。信長後に感状を與へらるゝ時、先づ小辨に手づから國久の刀を與へ、次に佐々に長光の脇指を與へ、汝が武功は、誠に大功の内藏助が従子なれば、と詞をかけらる。二條にて明智、信忠を攻むる時、清藏小辨に向ひ、素肌にて死なんは屍の上の恥なるべ

しとて打つて出で、一人づゝ敵を斬り伏せ、其屍を引き入れて、物の具取りて打ち着、又切つて出で、討死せしとなり。共に十六歳、容貌世に超えて美しかりけるが、面に血を濺ぎ、髪の亂れしを見る人、殊に惜しみ合へり、小辨は伏見の賤しき者の子なれども、美少年にて呼び出されけり。

小山田信茂誅戮の事

小山田兵衛尉信茂は、武田累世の長臣なりしに、勝頼に叛き、降参して善光寺にありしを、信忠堀尾茂助に下如して殺せとなり。則武三太夫を討手とす。士一人添へて甲冑を送り、一禮せん時刺し殺せとの事なり。三太夫善光寺に赴き、甲冑を贈り進らす由いひければ、小山田出て一禮すれども則武討つべき氣色なし、稍ありて、則武靜かに武田家士大將として、數世重恩の身、今度主君に叛き、不義の至りに候ふ故、討手に参り候、立ち向はれよといふ。小山田

聞きて、口惜しくも計られけるよ、疾く首を刎れられよ、といへども、則武猶動かず、小山田刀に手をかけ、是れまでに候ふと云へば、其時則武立ちあがりて、首を斬りたりけり。

馬場美濃が女召出さるゝ事

勝頼亡びて後、馬場美濃氏房が女、召し出さるべしとて、甲州の郡代鳥井彦右衛門元忠に仰せ出されしに、尋ね探し候へど、行方知れざる由を申しけり。程經て、其あり所知れたる由を申す人のありければ、東照宮何方に匿れるたるぞと御尋ねあり。即ち鳥井が許に、潜に匿し置きたると申しければ、すべて彦右衛門はぬからぬもの哉、と仰せありけるとぞ。

辻彌兵衛が事

辻彌兵衛盛昌は、天正三年の勘氣にて、七月甲州を出て、信州小諸の與良遠江が許に忍び居たりしが、勝頼亡びて後、徳川家に仕へ奉る。甲陽軍鑑に、勝頼天目山に落ち行く時、辻一揆の長となりて、攻めたる由を記せるは非なり。

明智光秀信長公を弑する事

明智日向守光秀、信長を弑せばやと思ふ事久し。天正十年六月朔日の夜、明智左馬助秀俊を寢所に呼び入れ、傍の人を退け、一大事のあるなり、蚊屋の中に入れといふ。秀俊頭を蚊屋の中にさし入れて、何事にてか候ふといふ。光秀汝が首を得させよと云へば、秀俊聞いて、一人のみにて候ふかと問ふ。光秀三人の命を貰ひ、猶足らざる故なりと云ふ。秀俊いと易き事にて候、大事こと能く成るべしと云へば、光秀如何に知りたるやと問ふに、事新しき仰せと、日比の根み思ひ合せて候ふと云へば、光秀いま信長を討たんと思ふなり汝を偏に

頼み思ふぞよ。先づ汝に語らんと思ひしに、中々諫め争ふべし。汝力を合せずば志遂げ難からん。従はずば、汝を斬らんと思ひしとて、盃を出す。秀俊先づ一人に語り給ふならば、諫め申すべし。早や外にも語り給はんには、馴も及ばずと申す事の候。泄れ聞て、隣を嚙むとも益なし。疾く打ち立ち給へとて、夜半ばかりに、俄に軍兵を押し出し、明れば二日の曙に、信長の宿せられし本能寺を取り圍む。森蘭丸長定、何事ぞ物騒がしきとて、白き帷子の上に、浅黄鹿子の小袖を被り、立ち出で見るに、壁の外に、水色の旗見ゆる。信長敵は誰れと問はるに、蘭丸明智にて候ふ、と申しも果てぬに、箕浦大藏、古川九兵衛、天野源右衛門等、大庭に亂れ入り、信長白き一重物を着、弓持ちて射られしに弦切れたり。地臘脂の帷子着たる廿七八歳ばかりの女房、十文字の槍を持ち來りけるを、信長おつ取り、暫し防がれしが、内につと入りて、隙子を引き立てたれども、燭臺の未だ残りし火に、信長の影映りたるを見て、天

野槍を取りのべ刺し通す。蘭丸弟の坊丸十七歳、力丸十六歳なりしが、切つて出で討死しける隙に、内より火をかけ灰燼となりたりけり。

秀吉備中にて光秀が書を取られし事

明智、信長を弑する時、秀吉は備中にて、毛利家に向つて陣せしが、秀吉所所に忍びの者を置かれしに、備中庭瀨にて、怪しげなる飛脚の者を生捕りたり。秀吉其書を披き見るに、信長を討取らば、秀吉必ず敗北すべし。秀吉を追ひ撃たれよと、毛利家へ云ひ送る書なり。若し此書毛利家に到らば如何なる謀あるべきも知るべからず。秀吉の慮淺からずと人云へり。又高松の城は容易く攻め落すべきに、水攻めにして日を経たるは、信長常に大功の速に成るを、忌み妬むの心あるを察しての故なりと云へり。

秀吉西國の米を買はれし事

秀吉備中に陣して、毛利と和平せん事を計り、密に手だてを運めぐらし、西國の米を、價たかを貴く買はれしかば、城じやうま米を出して賣る者多し。小早川隆景こばいがはたか、ひとりかたせいで賣らせず。信長弑せられて、秀吉と毛利家手切てぎれなるべかりしに、兵糧の豊ゆたかならざる故、終に和平に及べり。

光秀居城を築く事附辛崎の松の事

明智江州坂本に城を築く時、三甫さんぼといふ者、

波間よりかさねあけきや雲の峯

光秀わきに、

磯山づたへしける松村、

又光秀丹波龜山より、愛宕に續ける山に廓くわを構へ、此山を周山と名く、自ら武王わうに比し、信長を股いんの村王ちゆうわうに譬ふる心、後に現はれたりと人云ひけり、又志賀しが唐崎らさきの松、何日の比にか枯れたりしを、光秀植ふつぎて、今の松なり。光秀詠める歌、

われならで誰かは植ふむひとつ松心して吹け志賀の浦風

一説、青蓮院しやうれん宮尊朝みやうそんてう法親王はふしんわうの辛崎の松の記にて見れば、大津の城

主しんじやう、新庄しんじやう駿河守直頼すまのり舍弟しやうあに、松庵しょうあん(東玉)雜齋ざさい(直壽)此雜齋、天正十九年卯

の秋植ふられし由、其時の歌に、

おのづから千代も經ぬべし辛崎のまつにひかるしみそきなりせば

されば今の松は、此新庄の植ふられしか。

森蘭丸才敏の事

森蘭丸は、三左衛門可成が子にて、信長寵愛厚し。十六歳にて五萬石の地を與へらる。ある時刀を持たせ置かれしに、刻鞘の數を數へ居たり。後に信長傍の人を集め、刻鞘の數、云ひ當でなん者に、此刀を與ふべき由云はれければ、皆押し料りて云ひけるに、森は先に數へて、覺えたりとて云はず。信長其刀を森に與へられけり。信長森が明敏を試みらるゝ事多かりけれども、一度も過ちなく、其才老年の人も及ぶべきに非ず。明智が恨みある事を察し、潜に信長の前に出で、光秀飯を食ひながら、深く思慮する體にて、箸を取り落し、やゝ有て驚きたり。是れ程思ひ入りたる事、別の子細はよも候はじ。恨み奉る事云々なれば、大事を工むならん、刺し殺すべしと云ひけるを、信長否とよ、佐和山をば終に汝に與ふべしと云はれけり。これは、森これより先きに、父が討死の跡にて候へば、坂本を賜れと申しけるを、明智に與へられしかば、讒言すると思ひ、信ぜられず。果して弑せられき。

光秀反狀の事

光秀天正七年六月、修驗者を遣して、丹波の守護波多野右衛門大夫秀治が許に、光秀が母を質に出し計りければ、秀治其弟遠江守秀尙、共に本目の城に來りけるを、酒宴して饗し、兵を伏せ置きて、兄弟を始め從者十一人を生捕り、安土に遣しけり。秀治は伏兵と散々に戦ひし時、傷を蒙り途中にて死す。信長秀尙以下を安土にて磔にせられたり。丹波に残り居たる者ども、明智が母を磔にしたり。明智遂に赤井等を攻め從へ、丹波を信長より賜りけり。又信長ある時、酒宴して七盃入の盃をもて光秀に強ひらるゝ。光秀思ひも寄らずと辭し申せば、信長脇指を抜き、此白刃を吞むべきか、酒を飲むべきか、と怒られしかば酒飲みでけり。其後稻葉伊豫守家人を、明智多くの祿を與へ呼び出せしを、稻葉求むれ共戻さず。信長戻せと下知せられしをも肯はず。信長怒つて

明智が髪を搾み引き伏せて責めらる。光秀國を賜り候へども、身の爲に致すことなく、士を養ふを、第一とする由答へければ、信長怒りながらさて止みけり。東照宮御上京の時、光秀に馳走の事を命ぜらる。種々饗禮の設しけるに、信長鷹野の時立寄り見て、肉の臭しけるを、草鞋にて踏み散らされけり。光秀又新に用意しける處に、備中へ出陣せよと、下知せられしかば、光秀忍び兼ねて叛きしと云へり。されば信長の暴なる、もとより論を待たず。光秀土地を畧せん爲に、老母を質にして殺しぬる不孝を、信長の賞せられたる、君臣共に惡逆の相合へる、終を令くせざること理なり。

秀吉浮田を欺きて上洛の事

光秀信長を弑する時、秀吉備中より引き返さる。此時備前の浮田八郎秀家、幼少なれども、長臣老將の面々、如何なる謀あるや料り難ければ、先づ使を

岡山の城に遣りて、一刻も疾く馳せ上り、吊軍を志し候。岡山にて相謀るべしと云はせられける。浮田はもとより光秀に心を通じければ、秀吉の歸路を塞ぐべきや、如何せんといふ處に、かく告げ來れば、さらば城中にて討ち取るべし。願ふ處の幸ひなりと、密に悦び合うて、其謀をぞ相議しける。秀吉六月七日の明方に高松より引き返し、午の刻ばかりに宮内に着きて、やがて岡山に赴くべし、と云ひ觸らしけるが、俄に霍亂したりとて、打ち臥しければ、秀家の使來りたるに、近習の者共出で逢ひて、只今霍亂にて吐瀉せしが、腹の痛み少し止みて寢入り候と、應答ひて時を移す。其間に秀吉は、奥州驪といふ名馬に乗り、雜卒に交り、吉井川を渡り、片上を過ぎ、宇根に馳せ著けたれば馬疲れたり。さて使を岡山に遣りて、急ぐ事の候うて、脇道を通りて過ぎ候ひぬ、と云はせられしかば、浮田の人々皆呆れけるとぞ。

黒田孝隆思慮の事

秀吉信長の弔合とらひかつせん戦せんとして、備中より引き返されし時、姫路に立ち寄り
るべしと、人々も思ひけるに、黒田孝隆姫路に馬を駐めらるべき事、少しの間
も然るべからず候。假初めの旅にも、家出は遅々する人情なり。今度は、主君
の仇を討つべき爲の軍にて候。大和の筒井細川を始め、明智が親しみある者ど
も、馳せ加はりなば、ゆゑしき大事なり。如何にやせんと、思慮の未だ決せざ
る中に、急ぎて押し付けられよ、と謀りたりければ、能くこそ云ひたれとて、
一人も姫路へ寄りたらん者をば、忽ち誅すべし、と觸れさせられけり。孝隆先
だつて人を走らかし、姫路の町人ども、河原へ出て粥をたくして、軍兵に饗
すべし、と下知したりければ、食肴を河原へ持ち出でたりければ、立ち寄り
ずして山崎表へ押し付けられけり。太閤記に、姫路に二日滞留といへるは誤り

なり。

池田家の使者筒井順慶を試みる事

光秀信長を弑せし時、筒井順慶は光秀と親しければ、必ず與せしならんと人
人思へり。池田紀伊守、其臣日置猪右衛門、土倉四郎兵衛、丹羽山城、三人を
使として、順慶の許に遣らせらる。三人承りて、順慶若し明智に與せば刺し殺
すべしと申す。紀州公、否とよ、汝等死せば、我が片手を折られたるに同じ、
を制せられしかば、三人重ねて、順慶と軍せんに、幾何の手負ひ討死か候ふ
べき。さらば、三人も討死すべきにて候。三人をもて、多くの味方に換へ給へ。
順慶を討ち取らば、光秀必ず敗北すべしと申して、順慶が許に行く。順慶出會
ひて、如何にか光秀が不義に與すべき。疾く信長の弔軍せんと云ふに、實にも
傷りならぬ體なれば、三人悦びて、歸る道にて、山城今日順慶否と云はん

刺し殺さんと思ひて、坐中をきつと見たりしに、傍に十六七歳ばかりなる男の順慶が刀持ちて居たりしつらたましひ面つらたましひ魂つらたましひ只者ならず。順慶に飛びかゝるならば、頭二つに切り割りつべく見えし、と語りければ、日置も土倉も、されば我等も然思ひつる事よと云ひけり。かの小姓は牧野兵太とて、武者修行して、世に聞ゆる剛の者となりけり。

明智秀俊湖水を渡して坂本城に入る事

光秀信長を弑して、安土の城を攻め落し、左馬助秀俊に守らせて、山崎に打ち向ひ、秀吉と戦ひて敗北せり。秀俊安土を出で、光秀を救はんと、京をさして進む處に、はや光秀討たれたりと聞えしかば、坂本の城に入らんと、粟津を北へ、大津をさして行く所に、秀吉の先陣彌久太郎秀政に行き會ひけり。秀俊小勢なれば打ち破られぬ。本道は敵に塞がれつ。湖水に馬を打ち入れ泳がせけ

れば、秀吉の軍兵ども、汀に並み居て、溺れん有様を見よと笑ひ合へり。秀俊は白練に、雲龍を狩野永徳に描かせたる羽織を着、二の谷といふ冑を着、大鹿毛と名づけたる馬に乗り、年久しく坂本にありて、大津より唐崎までの遠淺は能く知りたり。容易く唐崎濱に乗りあげ、一つ松の下にて、馬には息あひの薬を飼ひ、追ひ来る敵を見て居たりしが、又馬に乗り、坂本に入る時、十王堂の前にて、馬より下り、手綱をもて堂に繋ぎ、矢立の硯取り出し、明智左馬助湖水を渡せし馬なりと、札に書きて、手とりがみに結び付け、坂本の城に入り光秀の妻子は天守に入れ、安土より光秀が奪ひ取り來れる、不動國行、二字國俊の刀、藥研藤四郎の小脇差、なら柴の肩衝、乙御前の釜などいへる名物の器を、唐織の肩衣に包み、天守より投げ下ろし、其後女童を刺し殺し、火をかけて自害せり、二の谷の冑に、羽織と黄金百兩添へて、坂本の西教寺に送りけり。後に山中山城守長俊が孫、作右衛門友俊、冑を望み乞ひて得たりしが、

程經て、紀伊の士宇佐美造酒助孝定が許に傳はりぬ。羽織は行方を知らず。馬は無双の駿足にて、秀吉志津嶽の軍に此馬に乗られしなり。

東照宮和泉國堺より御歸國の事

信長弒せらるゝ時、東照宮は泉州堺におはしましけるに、小勢にて斯かる亂れに、遙々と三河へいかでか引取らせ給ふべきと、人々色を失へり。東照宮素より地理を知し召され、河州飯森の宮は、要害の地なれば、其地を守りて、軍あらんと仰せありて、森口に着かせ給ひし時、本多忠勝京都に御使に参りけるが、道にて變を聞き引き返して來り、敵大勢にて候らん。疾く御歸國然るべからんと、申すを聞き召し、案内者は如何すべき。敵道を要ぎらんは必定なり、やみくゝと討たれんは、口惜しからずや、と仰せありける處に、信長より馳走につけられし長谷川竹丸、當國の交野郡津田の邊は、信長の恩を蒙りたる者

の數多候へば道導させ候ふべしと申す。宇津越を経て山城の相樂郡を過ぎ、木津川を渡り、それより宇治橋の上、一里ばかり東の瀬を涉り、江州信樂に出られたり。伊賀の上野鹿伏兎越を、伊勢の白子に至りて船に召され、然るべからんと定められけり。忠勝蜻蛉斬と名づけし槍を提げ、其邊の百姓を打ち具じ此殿の案内申せと云ひて、それより道々の村々にて匿したりければ、津田よりも案内者來りぬ。其日は山城相樂郡山田村に泊らせ給ひ、所々より心を寄せし人々ども、あまた警衛し奉る。穴山梅雪は、これまで従ひ奉りしが引き別れけり。

宇治より小幡越を江州高島に至り、濃州に赴き、甲州に歸るべき旨を申し

て引き別れしが、一揆の爲に、山城の綴喜郡にて殺されけるとぞ。其翌日、木津川に至らせ給ふ柴船二艘あり。忠勝借らんと云ふに、背はざれば憎い奴かな、切つて棄てんといふに、恐れて乗せ奉る。やがて涉り終らせ給ひ

て、二艘の船皆打ち破りて棄てたり、その明けの日、一揆石原村に集りて待ちかけたり。大和より従ひ奉りし吉川善兵衛、其子主馬助、柏の木を馬標にして、先駆けて追ひ拂ふ。柏を家の紋にせよ、と仰せけるとぞ。それより宇治田原の地、山口玄蕃御膳を献じて、宇治川に至らせ給へば船なし。榊原が士原田左衛門馬を乗り入れ、瀬踏みして打ち渉す。酒井忠次船一艘を探し出して渡し奉り、雑卒に至るまで、皆渡る事を得たり。江州信樂までは輪路なれども警衛に付き従へる人々多く、一揆手さす事もなし。多羅尾四郎兵衛光敏は、世信樂を領しけるが、其の子長兵衛御迎ひに参りたり。人心計り難しと、人々恐るゝ處に、忠勝いやしく光敏御敵するならば、彼れが家に入らせ給はずとも遁し奉らじ。一向入らせ給へと申せば、皆尤もなりとて、立ち寄らせ給ふに、御待遇を設け人々勞を忘れたり。

又忠勝、此時多羅尾二心ありと見れば、捕へて刺し殺すべしと云ひける故、

立ち寄らせ給ふとも云へり。

五日には、高見嶺を打ち越え給ふ。御供に候ひける服部半蔵正成は、もと伊州生れの人なれば、忠勝下知して、伊賀の案内したりけり。國士數多参りて、警衛し奉りて、上柘植より三里半ばかり鹿伏兎越といふ深山を越え給ひて、六日に白子の浦に着かせ給ひて、長谷川竹丸秀一(後藤五郎)を始めとして和州山州伊州の士に御暇賜り、時を得て濱松に参るべき由、懇に仰せを蒙りけり。それより三河に事なく歸らせ給ひぬ。伊賀は、去年九月信雄攻め入りて、打ち従へられし比、逃げ匿るゝ者を求め出し、殺害を専らとせられしかば、國士ども三河に参りて、御恩を蒙りたる人々多かりしかば、其從類皆警固し奉りけるとなり。やがて明智を追討のため、御軍を出されしに、伊賀の國士ども集りつどひて参りけるを、多くは大番に入れさせ給ひ、恩賞に與かりけり。

小寺黒田始末の事

黒田美濃守職隆(後宗圓と稱す)は、備前國福岡の人なりしが、播磨の小寺藤兵衛政職(まさと)に仕へて、子官兵衛孝隆(よしたか)(後如水と稱す)、共に功名ありて用ひられけり。播州は其比(ころ)、所々に人々地に據りて守り軍せしが、小寺は五着(ごちやく)にありて、姫路に小城を構へ、黒田父子こゝにありて、秀吉に頼みて、信長の旗下(はたした)に屬す。孝隆の子長政、其比は松千代といひしを、人質にして、秀吉の居城近江の長濱に置きたり。此頃毛利家の兵勢強かりしかば、小寺約を變ぜんとす。孝隆此は然るべからず。信長物荒き人なれども、一旦天下に旗をあげられん、行末は知らず、先づ時の宜しきに隨ふべし。松千代を棄つるを悲みかく申すに非ずと諫めけり。小寺聞き入れず。孝隆父宗圓に父子とも誅せられぬべき密謀を告ぐ。宗圓物馴れたる士五六人呼び集め、所存を問ふに、官兵衛五着に到られな

ば危かるべしといふ。孝隆、されば諫めは尤もなれども、事も見ずして姫路に立て籠らんは、君に弓を引くに非ずや。五着に赴きて力を盡し奉公し、かなはずば自害せん。其後人々心を合せ、父の御事頼みまかする由決斷せられしかば人々父子おし隔てられむはいかゞ候べき。只病とて五着の奴原(やつばら)に使をもて媚(こ)ひ詔(みこと)ひ欺(たぶらか)くに若くべからず。討手來らば力なし。其後一戦を遂げて五着を打破るべし。罪無くて討たんとする惡逆の人、天の咎(とが)なからんやと口々に云へども、孝隆各々存する旨は誠に理(ことわり)なれども、今病と云はんに、實(まこと)とは聞き入れじ。必ず主君に叛くと人に誹られん事士の志に非じ。君に深く思ひ入りたる忠の空しくならんは、運のきはめなれば力なし、われ一人誅せられたりとも、いかにかせん。此姫路をだに取られずば天下の安危歲月(としつき)を經ずして定るべしとて、とゞまる色の見えざれば、宗圓家の恥を思ひて身を捨てむと思ひ定むる事士の志なり。疾(と)く五着に行きて事かなはずば自殺せよ。後の事は心安く思ひ候へ。君の

志違ふともわれ叛くべからずといひしかば、孝隆打ち笑ひ、さらばとて座を立てば、人々只今思し召し切られての仰は遺言にあらずや。もし五着にて難を遁れ給はずば、其時人々五着の城を枕にせんと誓ひけり。宗圓、官兵衛は官兵衛の志をせよ。人々は人々の志をせよと下知せられしかば、孝隆五着に赴きけり。宗圓見送り、子ながらも恥かしき事なり。先だつべき親の留まりて子に死ねといふこそ口惜しけれ。されども君恩淺からざるは人の存する處なり。今譏言を信ぜらるゝこそ悲しけれ。孝隆を遣らずして引き籠り、謀叛して命は惜しき物ぞと教ふるは父の道に非ず、仇となりて身を殺すは恥を知る道なりけり。とて、さめさめと泣きたりけるが、さぞ五着にて謀りて見んに、今姫路に弓をひく設けなし。小酒盛して時々舞ひ歌ひて日を送れといひしとぞ。孝隆は五着に行きて心おくべ人の許に使用して、求め來れる者ありとて嬰し、しめやかに語りて打ち解けたる體なれば、いかに縋ふとも心の外に懸はれぬ事はあらしなど云ひ合へ

り。又此を疑ひて黒田父子は謀はかりごと、たくまじき者にて、よき士あまたあり、城に籠る用意せん間に官兵衛を以て引くべきも計り難しとて、姫路の様を聞くに、宗圓金剛に舞まはせて打ち解けたる體なれば、さては別の事もあらしといへり。此時攝州荒木攝津守村重は毛利に屬し、信長と戦ひ利あらずして有岡の城に引き籠る。此由小寺聞きて孝隆を呼びて、われ毛利に與すべきとは内々荒木と云ひかはしたる故なり。今毛利家にたよらん事は我が過ちなりと覺ゆるぞ。されども此まゝにて手切をせんに、表裏者と云はれんも口惜しければ、とく有岡に行いて荒木を諫めて、もし聞き入れば秀吉に謀りて信長と荒木和平をとり行ふべし。攝州信長に従はば我も眞まことに心を翻して信長に従ふべしといへば、孝隆聞きて、信長と荒木と和平は思ひよりも候はず。荒木度々信長に背きたれば、いかで其言を信ぜらるべき。参りたりとも徒事ならん。然れども辭し申せば勇なきに似たりとて、有岡に赴く。路姫路に立ち寄りて父子對面し、有岡に至らば、

必ず首を刎ぬべきか、おさへて囚とするか、二つの中に過ぎ候まじ。五着に死なんより有岡にて死に候へば、信長も聞き、又世の譽ともなり候べしと、思ひ切つたる色を宗圓見て涙に咽び、しばし物をも云はざりしが、やゝありて、誠に困厄の至極なれども、名にかへて身を捨つるは義を思ふ故なりとて見送りしかば、孝隆有岡に赴きたり。小寺兼て村重に密に毛利に一味すべきに、黒田父子人質の松千代を信長に出し置きたれば、かの父子は織田に内通の志ありと告げ知らせつれば、有岡の本丸に呼び入れ生捕りて牢におし籠みけり。五着に此由聞えしかば、小寺偽りて齒がみをなし、荒木が狼籍の次第遺恨深し。然れども此上は信長に一味の心を易へて毛利に與し、官兵衛を引きとる謀やあるべきと云はせしかば、宗圓怒りて官兵衛生捕になりしかば是非の論なし。年老いたる身の子を失ひし事は誠に力なき次第なり。然るに官兵衛を救はん事いはいれなきに非されども、先づ松千代を信長に出せし事は君も又臣父子と相計れる處

にて候ふに、今度官兵衛を有岡にて捕へたるは、荒木が横さまの振舞なり。相計れる處の人質を棄て、おしとめたる者を助くべきは逆ならずや。只順道に隨ひて天の冥見を待つに若かず。我若き時より度々の軍に臨み、小寺の家の危難を救ひ候に、今齡傾き、頼み切つたる長子をすて候事は口惜しく候へども、首を碎かるゝとも毛利に一味せよとの仰をば得承らじとて、刀を抽き誓つてければ、使も言なくて歸りけり。宗圓が主ども五着を攻め破らんといへども用ひず。村重心あらば勞るべし。もし五着を攻めなば、村重も官兵衛を殺害すべし。知らぬ様にてあれよ。斯くあらんと思ひて官兵衛が女房をば潛に此比引きとり置きたりとて驚かず。村重は小寺に頼まれて孝隆を生捕りたれども、己が敵にも非ざれば、いたはり置きけり。かくて信長有岡を攻むるに及びて、毛利家の後巻もせざれば、城落ちたりけり。孝隆は牢の中に呆れてありける處に、栗山備後(其時善助)時々有岡に行きて忍びて商家を語らひ、牢の後の沼より姫路の事

ども語りし事度々にて、案内を知りたれば、牢に走り行きて見れば、番人も落ち失せたり。此はと驚き且つ悦びて、善助棄て置きたる斧にて鎖を破り、引きたてけれども、三年居屈み、其上に濕瘡を病みて起つ事能はず。かたへなる牢中の人を頼み昇き負はせて城を出て、奇手の陣に行き、さて姫路に歸る事を得たり。秀吉播州に攻め入るに及びて、小寺は但馬に落ち行き、黒田父子危難を脱るゝ事を得て、孝隆に宍粟郡を賜はり、姫路を秀吉の城とす。後に如水と稱して智謀逞しく、秀吉の功臣第一と聞えしはこの孝隆なり。

井口兄弟武勇の事

黒田孝隆播州にて秀吉の命を承け、長の坪といふ城を攻め落し、井口猪之介、三宅藤十郎に其城を預け、孝隆は秀吉の先陣たる處に、其城より逃げ落ちたる者ども一族を催し、其夜攻め寄せたり。井口三宅人も少く攻め破りて普請も未

だせざれば守り難し。殿未だ遠くは行かせまじ。切りぬけて参り、後巻の事申すべしと云ひ合せ、三宅は百二十人計にて搦手にありしが、人数を残し、二十人計を連れ圍を出る。敵、利を得て攻め入りたり。井口は大手にて防ぎ戦ひしが、翌朝辰の刻、後巻の旗先見ゆる比、薙刀にて片股を薙ぎ落され、石垣にたより居たれども、敵恐れて近付かず。最後に大音あげ、此城の大將井口猪之介ぞ、首取れとて自害しけり。藤十郎は後三宅若狭とて武名あり。猪之介に三人の弟あり、六太夫、甚十郎、與一之助といふ。六太夫は播州北條の構を守りて討死しけり。ある時孝隆の士罪ありて討手向けらるゝに、却りて討手を切つて兄弟三人町に出で、大なる屋に取り籠りたり。甚十郎見て参らんといへども、孝隆許されざりしに、再三に及びければ、さらばとて許されたり。甚十郎其處に行くと忽ち門の潜戸をひき放し、楯にとりて飛びこみ、戸を以て二人を打ち伏せ、一人は切り殺し、打ち倒したる二人も切つて、首三つ取りて馬に乗り、

二町計歸る處に、罪科人の從者主人の首を見て、槍にて甚十郎が馬上を目がけ
 飛びかゝりて突く。突かれながら其者を切つて捨てたれども、痛手にて馬より
 落ち、少時ありて蘇生したるを、戸板にのせ來る。孝隆膝を枕にさせ、手は如
 何と問はるゝに、如此に候と一言いひて終れり。兄弟三人皆わが爲に死したる
 事、報ゆるに詞なしとて、孝隆其父與二右衛門が宅に自ら往きて申はれ、與一之
 助七八歳なるを呼び出さる。既に九つになりける比、三人の兄は勇氣ゆゑしき
 者なりけれども、人の性質は計りがたければ試みんと思ひて、礫を見つるやと
 問はるゝに、見ずと答ふ。今夜は月明かなり、某の所の礫木の下に行き、標
 を立てし、歸らんやといはるゝに、承り候とて、自ら御幣を切り、竹につけて與
 へらるゝを、與一持ち行きて立てんとするに、礫木動くを見て、死にきらぬ
 か、留を刺してとらせんとて、木に登るに、驚きて礫木より飛び下り逃ぐるを
 與一さては憎き次第なり、近すまじと追つ蒐ぐる。せん方なく宮のありし内へ

入り戸をたつれば、いつまで待ちても出づるを斬らんものと呼ばはる。さま
 さまにすかし、名をいへども歸らざれば、殿の仰にて威の爲に來り。著せさせ
 給ふ帷子の片袖を證據に取りて許されよといふによりて歸りぬ。朝鮮にて竹も
 木もなき廣野に一筋の道窪くて切通しに似て、其向ふ處大山の麓にて曲尺の
 如し。大穴を穿ち射手を籠め置きて、行きかゝる日本人あまた射殺され、屍相
 重れり。山陰の敵多少を知らざれば、進む者無し。井口が從者山崎真兵衛、見て
 參らん、馬を抑へて待たれ候へと云ひすて走り込む。井口も馬より下りて走り入
 り、山崎先づ射手三人を討ち取り、其首を持って大音あげて名乗たり。井口攻
 め入り追散らす。井口其時は兵助と云ひけり。此賞美に朱柄の槍を許され候へ
 と申す。卒爾には許し難し。一日に首七ツ取りてこそ朱柄は許さるゝと申し傳
 へて候ふと人々申しける故、事延びにけるが、其後井口一日に首七ツ、山崎も
 首六ツ取りしかば、朱柄を兵助に許されたり。晩年に村田出羽吉次と稱しけり

吉田六之介首供養の事

別所家にて、首供養したる人ありと孝隆聞きて、秦桐若首三十一取りたるに惜むべきは死したりき。吉田六之介正利供養すべしと云はれしに、正利首數二十七取りて候ふとて辭したりけり。孝隆小氣なる男かな。今年三十一歳なり此後首取るまじとや。先づ供養して後に、其數を合せよとて、米百石與へ、供養して播州青山の南に塚を築きたり。後所々の合戦、朝鮮の軍までに取りたる首五十に及べり。後壹岐といふ。

生田木屋之介武功の事

天正五年、黒田孝隆播州佐用の城を攻むる時、生田木屋之介夜中に忍びて、城際に近づきより、懐中の小鋸をもて塀柱の根を切り、目標をして、翌日城

攻めに、彼の柱に鈎繩を付けて引き倒し、先駈けして城に入りけり。木屋之介もと隅田小介といふ。日向國隅田刑部少輔が嫡子なり。十六歳の時朋輩を討つて出奔し、播州に行きて、孝隆の士井上九郎右衛門を頼みけるに、留め置き、未だ對面せざる處に、其夜隣家に人を殺し、取り籠りたる者あり。夫れをからめ出すに付き、即時に孝隆に申して、それより奉公しけり。播州生田の城にて高名あり。これによりて生田木屋之介姓名を賜る。是れその高名を長く顯さん爲とかや。

備前國福岡城合戦福井小次郎歌を遺して討死の事

文明十五年十二月十三日、備前福岡の戦に、

備前はもと赤松氏世々領せしに、嘉吉元年赤松滿祐滅亡の後、備前をば赤松相模守教之に賜り、教之が代官小鴨大和守備前にあり、應仁の亂の後、

備前津高郡金川村玉松の城主松田左近將監元成を、細川勝元相
 語らひしかば、元成兵を集め、小鴨を攻めんとするにより、赤松が家人、
 ちりくになりし者共元成に與し、小鴨を攻め落しぬ。赤松兵部少輔政則
 元成を賞して、伊福の郷に置きぬ。山名宗全、細川勝元共に病死の後、京
 都は少し静かなれども、諸國は彌大に亂れ、松田が一族ども、備前西郡の
 中あまた押領す。政則は將軍家より功を賞せられ、播磨備前美作を返し賜
 りぬ。山名右衛門督政豐これを怒り、文明十一年九月京都を出で、但馬
 の國に馳せ下る。かすれば政則も播磨に馳せつけて、此序に備前の松田が
 恣に攻めとりたる所を治め正さんとせり、元成此由を聞き、兵粮用意の
 爲にしたる所は返すべけれども、伊福の郷に於ては、軍功によりて賜りた
 る處なれば返すべからず。これは事に托して、我れを打ち亡さんの謀な
 らんとて、金川に城を構ふ。此城は、麓には大川流れ、峯高く、四方險に

て要害よき地なり。されども後、卷の手段を謀り、備後國山名俊豊に告げ
 て、備前を切り取り参らすべしと云ひければ、俊豊是れを悦べり。政則備
 前に赴き、松田がおして己が地にしたる所々を取り返しければ、文明十五
 年九月、山名も備後の尾道を出で、同國國分寺に着き、三千餘をかり催
 し、十一月七日備前の國に打ち入りしかば、松田が一族相集り、邑久郡
 福岡の城の西北の山に陣取りたり。福岡の城は、東西に大川流れ、中に島
 山あるを城に據りて、政則の守護代浦上喜三郎則國を始めとして、二千餘
 人立て籠り、川上の瀬は、長船右京亮等に野伏を添へて陣取りたり。十一
 月廿一日押し寄せて合戦あり。浦上が家人に、檜村與三兵衛、同又四郎と
 て兄弟あり。是れより前に、元成に奉公しける因ありしかば、密に語ひて
 十一月廿三日夜半風烈しき便に、陣屋に火をかけたなり。寄手内通に力を得
 て、やがて攻め寄せたりしに、城中嚴しう支へ戦ひて追つ返す。其後事あら

はれて、ならむら檜村兄弟を搦め取り、これを誅しぬ。寄手其後相謀りて、十二月十三日に又富岡といふ小山に兵を出す。城よりも、打つて出で、散々に相戦ふ。寄手も城兵も討たる者多し。

福井小次郎はもと京都の人なりしが、四歳の比、父源左衛門、當國の在番の時連れ下り、城中にありしが、今年廿一歳なるが、其日の軍に、父子の間を敵味方に押し隔てられ、父は城中に入りたると思ひ、走り歸りて尋ぬるに見えざれば、又城外に打ち出で、寄手に向ひて、福井小次郎と名乗り、たて縦さま、よこ横さまに切つて廻りしが、餘りに戦ひ疲れしを、家人肩にかけて城中に引き入れしにあさでふかて浅手深手二十六所被りければ、終に死にたり。父城に歸りて、小次郎が手箱を開きて見るに、あまた數多書き置きたる其中に、母の方へ幼少より別れ參らせて、此まま討死せば、御歎きあらんこそ心にかゝり候へ。暫し此世に残り給ふとも、終には逢ひ奉るべきにて候へば、思し召しわけて、慰ませ候へと、こまなく細々と書きて

おくに

生れにし親子の契りいかなれば同し世にだに隔てはつらむ

と書きたりしによりて、思ひ定めたる討死なりと、人行惜しみけるとぞ。

再び福岡合戦、薬師寺、額田、片岡三士討死の事

文明十六年正月六日、又福岡にて軍あり。城兵敗北する處に、薬師寺四郎左衛門兼刀を取り返し合せ、爰にて討死するよとて支へ戦ふ。同彌四郎等、四郎左衛門を討たせじと取つて返し、つさか津坂の山の麓より、しろぎは城際まで備の兵にて多勢を防ぎて、拂ひ退きにしけり。寄手の中に、福屋九郎右衛門とて剛の者、鉄形打ちたる冑を着、透間もなく四郎左衛門に切つてかゝりしに、四郎左衛門が家の士返し合せて、福屋は討たれぬ。されども寄手彌追ひ詰めしかば、薬師寺次郎左衛門、額田十郎左衛門、片岡孫左衛門三人引返し枕を並べて切り死

にしたりけり。是れば三人必死を約束したる故さぞ。是れより前^{さき}三人物語りせし時、次郎左衛門いひけるは、この度の軍必ず味方打ち負くべし。松田は素^{もと}より當國の者なり。後^{うしろまき}巻を味方より申せども、播州の加勢も來らず。政則^{まゆみ}眞弓峠の軍に打ち負け、姫路に引き退きしと聞ゆれば、味方は力を失ひぬ。さらばとても討死すべき身にて、人の後^{あと}に長らへてあらんも本意にあらず。重ねて軍あらば、必ず討死せんと語りければ、兩人聞きて、誰々も同じく存ずる事ぞと互に同じ討死せんと約束しけるが、今日次郎左衛門打ち出づるとて、唯今敵の手に渡るべき首なり、最後の對面すべしとて、鏡に向つて、にっこりと笑ひて出でしとぞ。額田は岡本筑後守に向ひて、子にて候ふ、又三郎は、一子なれば、取りわけて不便に存ずるなり。我れと一所にあらば、必死を免^{のが}るべからず。宜しく計らひ給はれと云ひければ、心得たりとて引き分ちしかば、今日^{けふ}討死をせざりしとなり。片岡は我が家來に向つて、わが首必ず敵に取らるべし。これを標^{しるし}

に死骸を尋ねよとて、小縫^{こより}を以て左の二の腕^{ふたへ}を二重に結ばせたりしが、果して是れを標^{しるし}に死骸を求め得たりとかや。

卷之五終

卷之六

山崎合戦の時堀秀政寶寺の山を取る事

山崎合戦の時、堀久太郎秀政の士の子、何某なにがしといへる者、明智が許に奉公してありしが、光秀夜の未だ明けざる内に、寶寺の山に兵を押し上あぐべしと謀はかりしを、父のもとに告げやりて、思ひも寄らず敵味方となり、明日あすは一戦に及ばん事を歎きける。其書状を則ち秀政に見せたりければ、秀政夜半やはんに寶寺の山に押し上ちがり、陣し待ちかけたりけるを、いかで知るべき。夜明け方に明智が先手さきて押し寄せたる處を、秀政山やまのうへ上より鐵砲を打ちかけ、不意に切つてかゝり、追ひ崩して一戦に利を得たり。

森寺政右衛門武名の事

山崎の合戦に、明智が先陣と護國公の先陣と戦を挑む。時に侍大將森寺政右衛門忠勝、眞先まっさきかけて敵を追ひ立つる。森寺が馬標うまじるし檜木笠ひのきがさなりしを、明智が者ども見て、今日けふ檜木笠の馬標持たせたる大剛の者、下知せし有様目を驚かし候。姓名を承らばやと、度々たびぐよば呼はりけるを、秀吉聞きて今日けふの軍森寺が一人の武名をあげしとて、桐の紋付きたる羽織を與へられけり。

則武三太夫功名の事

山崎の軍に、堀尾帶刀たてわきよしほ吉晴の士、則武三太夫首を取りて、吉晴の前に來る。吉晴思ひしよりも出かしたり、と詞をかけられしかば、則武怒つて、首を提さげて進み寄り、かゝる時は、大將も目の暗くらくなる物に候。則武三太夫が取つたる

首能く御覽候へと罵る。吉晴も憎き奴哉と云ふまゝに、刀を抽いて斬られしに背の屋を削りたり。則武眞一文字に敵の中に駆け入り又首を取りて歸る。吉晴は必ず則武は討死せんと悔み思はれし處に、則武來りければ、大に悦んで、汝を先に褒めたる詞、賞する餘りに、思ひしよりもと云へる、剛の者に云ふべき詞にあらず、我が過あやまちにてこそあれ、汝が二度の先駆さきがけ、大きに勝すぐれしよと感ぜられけり。

瀧川一益厩橋を退く事

天正十年、瀧川左近將監一益さこんしやうげんかすますは、信長の命により、關東の管領として、諸將の質を取り、上野の厩橋まゆはしにありける處に、六月七日信長弒せらるゝの變を聞き、老臣ども事を匿かくさんと云へども、一益惡事千里といふ諺あり。秘すること能はじとて、上州嶺みねの城主小幡上總介信眞ちほたかづのすけのぶまこと、鷹巢たかのすの城主鷹巢三河守信尙のぶなほかな、金

山の城主由良信濃守國繁、館林の城主長尾但馬守顯長、小股の城主澁川相模守
 義勝、倉賀野の城主倉賀野淡路守秀景、白倉の城主白倉左衛門佐藤、岡の城主
 内藤大和守秋宣、安中の城主安中越前守、高山の城主高山遠江守重光、五閑の城
 主五閑刑部、小泉の城主富岡六郎四郎、石倉の城主長根縫殿介、大戸の城主
 大戸民部直光、木部の城主木部宮内貞利、和田の城主和田右兵衛太夫信業、那
 波の城主那波對馬守宗元、武州忍の城主成田下總守、深谷の城主深谷左兵衛
 憲盛、松山の城主上田又次郎政朝等の諸將を招き、信長の變を告げ、各の人質
 を歸し、急ぎ上京して、弔軍すべき旨を語る。諸將大に感じ、此一大事を
 告げて、人質を歸されんと候ふに、争でか二心候ふべき。人質を其まゝ置きて
 仰せに従ふべしと云へば、一益諸將の義心、謝するに詞も候はず。北條の表裡
 定めて一益を討ち取りて、上野を押し取るべきならむ。此方より打ち向ひ、一軍
 せんものをとて、城には同姓の彦次郎忠往を守りに置き、一萬ばかりの兵を率

ゐて、神奈川に押し出す。

一説に、北條家より入質を渡し、早く城を出よ、さらずば一戦すべしと云
 ひ送る。一益吾れ信長の命を受け、關東の管領なり。今危きに臨んで何ぞ
 北條が下知に付くべきやとて、兵を出せりとも云へり。

北條氏直果して小田原より兵を出し、武州兒玉郡本庄に着きて、先陣北
 條安房守氏邦、神奈川に押し寄す。一益は川を後にして相戦ふ。大敵支へ難く
 討たる者多し。一益厩橋に歸り、其日討死せし人々の姓名を過去帳に書きて
 黄金を添へて寺に送りにて供養し、諸將を集め、暇乞ひとて酒宴し、一益鼓を打
 ち、兵の交り頼みある中のと語りければ、倉賀野淡路守名殘今はと鳴くとりと
 囃し、終夜酌み酔ひて、太刀刀取り出し、上州の諸將に引出物にし、懇に暇
 を乞ひて、六月二十日厩橋を打ち出で、各人質を歸しけれども、皆請け取らず
 して、驛馬等の事沙汰し、是れを送りて笛吹嶺に至る時、國人の人質悉く歸

し、木曾路より歸京す。瀧川彦次郎は、一益が長男三九郎、二男八丸を伴ひ、木曾路にかゝる時、一揆起り八丸を奪ひ取られしを、一益が士古市九兵衛一揆を追ひ拂ひ、八丸を奪ひ取りて、一益と同じく長島に歸る。

一説、神奈川の合戦に八丸生捕られしを、古市追ひ討ちて、其敵を切り伏せ、八丸を奪ひ取つて、連れ歸ると云へり。また笹岡平右衛門、津田治右衛門踏み留りて討死しける。其間に一益兵を納めて、厩橋に歸ると云へり。笹岡平右衛門は、一益の馬取りより取りたてられ、氏は笹岡彦次郎是れを與ふ。武功度々に及びて士大將となり、武者奉行たり。又酒宴は倉賀野にての事とも云へり。

關東にて、一益厩橋を引拂ひたる振舞ひ、殊に賞美しけるとぞ。

光秀愛宕山にて連歌の事

天正十年五月廿八日、光秀愛宕山の西坊にて、百韻の連歌しける。

時は今あめが下しる五月かな

光 秀

水上まさる庭のなつ山

西 坊

花おつるながれの末をせきとめて

紹 巴

明智本姓土岐氏なれば、時ど土岐と讀みを通はして、天下を取るの意を命めり。

秀吉既に光秀を討ちて後、連歌を聞き、大に怒りて紹巴を呼び、天が下しると

云ふ時は、天下を奪ふの心あらばれたり、汝知らざるやと責めちる。紹巴其

發句は、天が下なると候ふと申す。然らば懷紙を見よとて、愛宕山より取り來

て見るに、天が下しると出でたり。紹巴涙を流して、最れを見給へ、懷紙を削

りて、天が下しると書き換へたる迹、分明なりと申す。けなげにも書き換へぬ

とて、秀吉罪を赦されけり。江村鶴松筆把りにて、あめが下しると書きたれど

も、光秀討たれて後、紹巴密に西坊に心を合せて、削りて又始めの如く、あめ

が下しると書きたりけり。

幸田彦右衛門が母義死の事

織田信孝のよたか、秀吉と弓箭ゆみやをとる時、信孝の乳ちの人を人質に、秀吉のもとに出し置かれしを、磔はりつけにして誅せらる。かの乳ちの人の子は、幸田彦右衛門とて信孝の士大將なり。最れより前まへ、秀吉信孝の長臣等を語らはるゝに、岡本下野守は同心して、信孝に背きけれども、幸田は背かず、幸田が母誅せらるゝに及びて子の彦右衛門に書を送りて、我れ今空かなしくなること、努々ゆめく歎くべからず。親は必ず子に先立つ習ひなり。唯忠義を守りて、君にな背き参らせそ、と言ひ遣つかはしければ、聞く人感あじ合へり。天正十一年四月十八日、秀吉の先陣信孝の地に責め入る時、幸田兄弟潔く討死したりけり。幸田が母は、實まことに漢の王陵が母の志とも云ひつべし。但し王陵が母は、天下を知しめすべき高祖の事を識りたれ

ども、只今危難に迫れる織田家に、忠を盡せと云へる、眞まことに有難きことなるべし。

志津が嶽合戦秀吉智謀の事

佐久間玄蕃盛政もりまさ やながせ、柳瀬にて中川清秀きよひでを討ち取りける時、秀吉長瀬ながはなより、一騎が駈がけて来られけり。志津が嶽に到れば日暮れぬ。陣の相去る事二里ばかりなり。盛政使を以て、早くも軍を寄せられ候、相待ちて候ふほどに、夜明けなば、矢合やあはせ仕るべしとぞ言ひ送りける。秀吉聞きて、是れより申さんに、ゆゑしくも承り候。明みやうにち日潔く軍を遂とげ候ふべしとて、使を返して後、吾れに怠らせ、夜討ちせんとの事ならん。遠き異國の張良は知らず。我れを欺たはかありとは覺えずとて、野にも山にも、箒かやりを透間すきまなく焚きて、白日の如し。佐久間は、敵人馬てきじんばの行程かうていを急ぎて、疲れたる處へ、するりと押し寄せ、打ち破らん

と思ひけるに、秀吉の謀に夜討の支度空しくなりにけり。

堀七郎兵衛見切の事

志津が嶽の合戦に、堀久太郎秀政兵を分ち出さんとする時、其臣堀七郎兵衛押し留て曰く、勝家の陣より佐久間が陣に、頼に使來ると見ゆ。疾く引き取れとの事ならむ。若し引き取らば、玄蕃本の道なば歸るべからず。然らば、間近き所にて戦ひあるべし。玄蕃引き取らずば、勝家必ず來りて軍あるべし。此二つを出づべからず。兵を分たずして待つべしと云ふに、玄蕃も退かず、柴田も進まざりしかば、勝家運盡きたりと云ひしが、果して敗北しけり。又志津が嶽の事を、老功の人に問ひしに、勝家の詞の如く、玄蕃引き取らば、勝利を全うすべし。玄蕃が言の如く、勝家押し詰め來らば、必ず敗軍すまじきなり。兩將互に猶豫して、勝を失ひたりとぞ語りける。

志津が嶽七本槍の事

志津が嶽にて、佐久間が人数亂るべきを秀吉見て、近習の人々に向つて、爰ぞ槍を合せよ、と詞を懸けらるれば、各競ひ進む。福島市松、加藤虎之介、加藤孫六郎、片桐助作、平野權平、脇坂甚内、糟谷助右衛門七人なり。其夜秀吉今日の七本槍の者として、呼ばれけれども、誰れといふ事を知らず。其時指を折りて數へられしかば、前に進み寄りたり。是れより志津が嶽の七本槍と世に唱へけり。中にも福島、壹番に進んで槍を合せたる上、首を取りたりしかば、五千石與へられけり。其餘は皆三千石與へられぬ。福島は紙の切裂じなへの指物加藤義明は紫ほる、清正は紙のして馬れん、片桐は銀の切裂えづる、平野は紙子の羽織、糟谷は金の角取紙のえづるの指物さゝれたりとぞ。

石川兵助戦死の事

志津が獄の前夜、石川兵助と福島市松と口論し、既に刺し違ふべき體なりしを、座にありし面々、明日の軍に身を捨て、高名を遂げらるべきに、こは如何なる事ぞと押し留めければ、石川面々の前にて、口も得明かざる市松、何とて怖き槍先に向ふべき。明日我が後影を見よかし、と言ひ捨て、出でけるが、直に柳瀬に赴きて、只一人眞先に進みて討死しけり。人々其勇氣は嚴めしけれども、其怒りは戒とすべしと、云ひ合へり。秀吉石川が弟長松に、感狀を與へられけり。其文に曰く

今度三七殿依_て違_ふ武_に美濃大垣_に之處柴田修理亮勝家出_て張柳瀬_に欲_し遂_げ戦_ひ之時兄兵助先_づ赴_き合_し槍令_じ斃_せ死_す拔_き群之_を擯_じ於_て眼前_に見_ゆ之_を雖_も爲_す若_し輩_は念_ふ兵助之壯志_と與_へ秩千石_に向_て後愈_に抽_き忠節_を一_に者_也

天正十一年七月五日

石川長松殿

秀吉

と書かれたり。

佐久間盛政生捕るゝ事附久右衛門安次

源六郎實政が事

志津が獄の軍破れて、佐久間を生捕り來る。秀吉見で汝は武勇逞しき者なり。助けて國を與ふべし。二心なからんやと問ふに、盛政冷笑ひ、我に國を與へなば汝を生捕り搦めん事、今日我が身の上の如くせん。新に恩を受くるとも、柴田を忘れんやと云ふ。死すべきに及びて、大紋紅裡廣袖の小袖白帷子に、空炷して呉れられよ。一生の終りに、風流を盡したし。是れ一つの望みなりと云ひしかば、秀吉其望みに任せられしかば、大に悦んで是れを着たりけり。玄

蕃其時廿七歳、皆人惜しみ合へり。

柴田亡びて後、其従士佐久間久右衛門安次、源六郎實政兄弟、紀州に遁れ、粉川法師三池を語り、河内雲坂に城を構へ、後亦南河内天野山の國見を要害にして、度々軍しけるが、遂に秀吉に攻め落さる。後に小田原に入り、北條亡びて、兄弟金澤の稱名寺にありと、秀吉傳へ聞き、伯父勝家の爲に吾れを仇とする志、誠に大丈夫と云ふべし。今日本平均しぬれば、心を改めよとて、安次に一萬五千石、實政に一萬石與へて、蒲生氏郷に附けらる。兄弟氏郷に一禮しける時、躓きけるを人皆笑ひしかば、氏郷物の思慮なく、汝等が奉公ぶりを彼に競ぶる事よ。兄弟とも壘障の士にあらざる物をと言はれけり。

尼子家の十勇士

あまこけじうゆうし
尼子家十勇士と世に唱へけるは、山中鹿之介、蔵原茨之介、五月早苗之介、うへだいなば
上田稻葉之助、尤 道理之助、早川鮎之助、川岸柳之助、井筒女之助、あは
なるこ
鳴戸之助、破骨障子之助なり。

信雄長臣を誅せられし事

秀吉信雄を打ち亡さんと謀りて、先づ信雄の長臣岡田長門守、津川玄蕃、淺井田宮丸、瀧川三郎兵衛を招き、懇に待遇して後、信雄に自害をすしめよ。さらば恩賞厚く行ふべしと語られけり。聞き入れずば首を刎れん氣色なる上、神文を書けよと責めらる。四人力なく承りぬと言ひて、起請文を書きにけり。秀吉も約を背かじと、神文を出されけり。是れは一人づゝ語らふべきを一同に招きたるは、信雄に告げ知らする者ありて、残る者を誅せさせんとの謀なり。又皆秀吉に實に心服せずとも、既に神文を書きたれば、疑ひて一和すべからず

と思慮せられたるなるべし。瀧川素僧もとくわんなりしを、信長呼び出し、四萬石の地を賜りし身なれば、長島に歸りて、信雄に斯くと告げ申せば、頓て三人を誅せんとて、長門は飯田半兵衛、玄蕃は土方勘兵衛、田宮丸は森源三郎と討手を定められけり。土方承りて、長門をば臣に仰せ付けられ候へ、打ち留め申さんと云ふ。飯田既に定りたる上は、何の申し條のあるべきぞと云へば、信雄さらば、長門をば土方討ち候へ。飯田は既に下知したれば、討ちたるに同じとて、長門を土方に譲りけり。土方が斯く言ひけるに故あり。土方は始め彦三郎と云ひけるが、太く逞しく、胸より手足に至るまで、毛生ひ熊の如くにて、勇猛の士なり。長門常に土方に語りて、殿は人の申す事軽々しく信ぜられて、日比我れを疎まるといふ、と度を云ひけるを、土方夫れは戯れか、又は汝の心の違ひたるならんと云へば、長門いやしく此長門をば、必ず誅せらるべし。其時汝討手なるべきよ。容易く討たるべ身にあらざと云へば、土方聞きて、討手の仰せを奉ら

んに、此勘兵衛ならで、又誰れかあるべきかと語りたるに、長門仰せに寄りて此七つ胸切り落したる脇指にて、汝が頭を斬り破らんと云ひける詞に依りて、斯くは申せしなり。天正十二年三月三日の禮に、岡田信雄の前に出でけるを、楯圖とせられけり。岡田其日は、脇差を構たへて進み出る。信雄新に造らせたる鐵砲を見よとて指し出し、此臺尻の穴は、何の爲ぞと問はるに、岡田少し差しうつむく時、土方つと寄りて引つ紐んだり、岡田己れをやと云ふまゝに、脇差しを七八寸抽きけれども、大力に強く抱かれて、抽きも放たず捻ぢ合ひける處を、信雄土方放せ、我れ自ら切らん、と詞を懸けられしに、臣と共に斬らせ給へとて放さず。信雄放たされば、何時までも斬るまじと云はれしかば、土方岡田を突き放しさまに、小脇差を抽いて指し通せば、信雄すかさず切つて殺されたり。津川は、此騒ぎを聞きて、走り來りけるが、信雄に行き逢ひ、刀を取り延べて切りたりしに、廊下の長押に切り付けたるを、飯田傍より刺し殺

しけり。淺井をば森討ち留めたり。是れよりして、秀吉と弓箭をとられけり。

平松金次郎始末の事

平松金次郎重之、甲州の温井ぬくろと同じく天龍川を渡る。平松先達さきたつて陸くがに上がり、船に残れる従者温井に無禮の事有て、忽ち切り殺しけり。扱平松に斯くといふ、間もなくと云ひければ、無禮する者は吾も捨置かじとて色も變ぜず、人皆平松を誹そしりける處に、幾程なく、長久手の軍に、平松と鳥井金次郎と先を争うて槍を合はす。平松が相手は森武藏守長可の士、山田八右衛門とて始め播州三木の城主、別所長治に仕へて名高き勇士なり。平松肥え太りて小男ふとなりしかば、東照宮さぞ走り廻り不自由ならんとて、常に笑はせ給ひしに、其の日御前に進み出で、不行ふきやうぶもの歩者今日槍を合せて候と立ちながら申して傍若無人の有様なり。賞せられじかども猶不足に思ひけるに、前田利家の士、山田出羽其の

時平一郎とて、秀次に仕へしが、秀次に申して一萬石の祿にて招かれけり。平松是れに約し京に趣く時、心易き朋友に暇乞して立去りけるを聞き召し、追々おひく討手を出ださせ給ふ。大剛の平松なればとて、第一番に渡邊半藏、續いて河村善七郎、大久保與一郎、坂部治兵衛、段々だんぐに追駈おつかける。坂部、袋井にて逢ふ、平松は久能くのへ行く本坂越に、遠州可睡齋(曹洞宗の禪寺)立ち寄ると物語す。坂部は兄三十郎に用の事有て、横須賀へ行くとて打連れたり。道の別れ際に久しく逢はじと馬より下り、暇乞ひする時、坂部平松を一太刀斬りたるに如何したりけん、切り外はづしければ、平松坂部が眉間を切る、坂部眩くらみけれども、さしもの者にて、落人おちうどあり、打ち留めよと呼ばはるを聞き、近所の郷民群り出づるにより、平松可睡齋へ入りたるを取り圍み、横須賀よりも馳せ集り寺を取巻きけれども、平松は爰に居らすといふを、小僧を捕へて責め問ふにより、平松何方へも逃ぐる者にあらず、爰にて腹切らんとて立出で、坂部三十郎に向ひ、

治兵衛は殊に親しく語りけれども、不便ながら身にかゝる火を拂ひて、是非なく切りたるといふ。三十郎聞いて、治兵衛疵淺しと答ふ、平松吾が斬る程にて助かるべきや、日比の交り故止めは刺さゞりきというて腹切る時三十郎介錯せんとすれば、平松治兵衛を吾手につけ、今汝に首を討たれんは心よからずとて、同心せざりしとなり。

又一説に、平松は度々口論の時後れ有り、殊に遠州新井の渡り舟にて、柏原新五郎、平松が従者を討つたるに、おめくとして有りければ、人々嘲笑ふ。東照宮聞し召し、人は何ともいへ、平松が眼差剛の者なりと仰せられしが、果して長久手にて懸り兼ねたる處に、平松齒の羽織を着、十文字の槍を提げ進み出で、池田家の軍兵の真中に槍を入れたりける。其後出仕の中にて諸士に向ひ、吾胎内より厚恩を請け、殺りに一命を捨てじと思ひしが、今は早や思ひ残す事なし、誰にても出られよ、撫切にすべし、昔

の金次郎とな思はれそ、殊の外荒者になりたりと、大言しけるに、一人も答ふるものなし。平松が勇名高く聞えて、先年天王寺勝曼の槍、具設塚の槍、備前八濱の槍をこそ言ひ傳ひたれ、平松が槍は近き頃稀れなりと世の人賞しけり。秀次一萬石にて招かれしかば、平松立退きけるを聞し召し小栗又市、渡邊半藏、河村善七郎、坂部治兵衛を追手に出でさせ給ひ、岡崎へ早飛脚にて本多作左衛門にも御下知有り、平松終に袋井の北なる可睡齋にて、自害すともいへり。

水野勝成高名附行狀の事

長久手の軍に、水野忠重の嫡子勝成は、目を病みて首を着ず。鉢巻したりけるを、父見て、汝が首は尿壺にしたるかと思われしかば、父ながら餘りの詞かな。眞先かけて首を取るか、吾が首を敵に返さるか、二つの中よと云ふまじ

に、馬引き寄せて打ち乗り、もろ鎧をあて、駈け出す。忠重彼れは如何にとて、太田重助といふ士をして、呼び歸されけれども、耳にも聞き入れず。又水野喜右衛門馳せ來り、引き留めんとするを、勝成はたと睨んで、疊の上の諫めは聞きも入るべし。只今大軍の中に駈け入り、功名せん時止れとて、引き返す様や有ると云ひ捨て、秀次の將、白井備後守が陣に突いてかゝり、冑首を取りて馳せ歸る。此日の一番首なり。勝成あら者にて、人を物ともせず。忠重の心に忤ひ、虛無僧となりて、國々を廻りて武者修行す。後に忠重死して、東照宮勝成に三州刈屋を賜はり、日向守と稱して、大阪の時、大和口の先陣として大功ありし人なり。勝成十萬石を賜ひて後、愈士に下り身を卑しくして、すべて士に貴賤はなきものなり。主君となり従者となり、互に頼みあひてこそ、世はたつ習ひなれ。されば、大事の時は身を棄て、忠義をなす事ぞかし。汝等我れをば親と思はれよ。我れ汝たちを子と思はんと、常に士に云はれけり。

年老いて、鷹野に出る時、行歩叶はず。蒲團に乗りて士に昇かれ、士番所にては蒲團と共に下に居て、年寄りての鷹狩をかしかるべし。鳥とらん爲にあらず、心ありての事なりと度々いひて打ち過ぎられけり。或る時鷹狩の野にて、昔勝成に仕へし士を見かけ、いかに懐かしや、我が方にて祿三百石なりに立ち去りて、越前にて千石の祿と聞く。今爰に來られしは、如何にと問ふに彼の士、仰の通り祿は越前にて増し候へども、殿の下を勞り、懇に待遇し給ふなじみ、祿には換へ難く、暇乞うて歸り候ひぬと申せば、勝成大に悦び、折に觸れ思ひ出せしなりとて、即日祿を増し與へられけり。その後勝成隠居して又鷹狩の時、彼の士の家の門閉ぢたるを見て、如何にと問はるゝに、美作守の心に背く事有りて、暇を乞ひ走りぬと答へしかば、彼の者は越前の祿千石を捨て、小祿の我が家を慕ひて歸りし者なるに、いかに作州は思へるにや。斯く云ふ勝成は、若き時心得過ちて、武藏の金川根笹流の弟子となり、尺八一本携

へて、虚無僧となりて日本國を廻り、或る時は堂塔に夜を明かし、或る時は野にも山にも日を暮し、様々に艱難に遭ひ、人にも誹られしが、一言虚妄を云ふ事なく、不仁の振舞ひせざりし故にや、今福山十萬石を賜りぬ。然れども下の情を知る事は、これ虚無僧たりし故なり。返すぐも惜しむべき士を失ひぬるよ。美作は下の事は知られぬぞかし。すべて善き士は、主君又は頭の下知をも無理なる事は心服せず。たとへ少しの過ちありとも、能き士は二度も三度も知らぬ體して、猶已み難くは、傍輩に諫めさせんものを、美作の政事歎かしきぞとて泣かれけるとかや。

本多忠勝忠勇の事附忠信の冑の事

東照宮小牧に陣しておはしませしが、秀吉兵を分ち、中入りすと聞し召し敵の迹に従うて向はせ給ふ。小牧には石川伯耆守數正、酒井左衛門尉忠次、本

多平八郎忠勝を殘させ給へり。然るに秀吉大軍を出して、長久手に向はれけるを見て、忠次は秀吉の本陣樂田へ押し寄せ、火をかけて攻め撃つべしと云ひけれども、石川秀吉後に變ありと聞きて、彌怒られなんと、強ひて押へて止りけり。忠勝は秀吉の馬標を見るより、僅に五百ばかり引き具し、小牧を駈け出で小川一筋隔て、秀吉に相並び、長久手さして馳せ向ふ。路にて足輕を進め、鐵砲打ちかけ、一軍せんとすれども、秀吉見ざる體にて取り合はず。龍泉寺の前にて、忠勝馬を川に打ち入れ口を洗ふ。秀吉あの鹿の角の立物の冑を着たるは大將よ、誰れか見知りたる、と問はるゝに、稻葉伊豫守道朝過ぎし年姉川の軍に、武者出立ち見知りて候。本多平八郎にて候ふと申しもあへぬに、秀吉涙をはらくと流し、五百に足らぬ士卒を以て、吾が八萬の軍にかけ合さんとす千死に一生もなきぞかし。然るに道を隙取らせ、己が主君の軍に勝利あらせんとの志、勇と云ひ忠と云ひ、誠に類なき本多かな。秀吉運強くは軍に勝たん。

あたら者を討つべからずとて、弓鐵砲を制せられけり。斯くて忠勝長久手に馳せ付きたれば、軍終りて敵味方ともに見えず。こは如何にと云ふ所に、味方打勝ち小畑をばたに入らせ給へりと聞き、揉みに揉んで追つ付き奉り、御馬の傍かたはらに乗り寄せ、云ひ甲斐なくも小牧に捨てさせ給ひ、かゝる軍に合ひ申さずと申しければ、聞し召し取りあへず、汝が躬みは我が身なると思ひて、小牧にとゞめ、後に危き事なくてこそ、軍には勝ちたりと仰せありけり。其後天正十八年、秀吉北條を打ち亡し、七月廿六日野州宇津宮にて、平八を呼ばれけり。忠勝は下總の廳南にありけるが急ぎ参る。秀吉諸大將並み居たる中に呼び出し、熊野より佐藤四郎忠信が肯を得させたるものあり。四郎が忠義後世のちのよまで語り傳ふ、四郎に劣らぬ人に着せなんと思ふに、誰れかあると云はれしに、答ふる人なし。其時秀吉四郎に優れる者は平八なり。子細は云々しかくなりと、長久手の軍物語り、忠勝の有様つまびら詳かに言はれて、即ち肯を忠勝に賜りければ、忠勝面目身に餘る

心地して出でられけるに、其晩又忠勝を招き、傍かたへの人を遠ざけ、自ら茶を與へ、今日いづらも諸大將並み居たる中にて、汝が武勇を褒め舉げたるは、秀吉が恩ならずや。主君の恩といづれぞ、と問はるゝに、首を低れて物言はず。類に問はれければ、忠勝承り、誠に忝しとは申せども、果世の主君の恩と並ぶべきにあらずと申されしかば、秀吉愈感ぜられけり。

一説に、忠信の肯を賜りけれども悦ぶ色なし。いかにと云へば、いやとよ。忠信武勇さのみ羨しくもなし、主君と仰ぎし九郎判官も、吾が爵位も同じ。唯世々家に傳へたる鹿角しかのつのの肯こそよけれと言はれしとぞ。後忠信の肯は、二男忠朝たうともに譲り、鹿角しかのつのの肯は、嫡子忠政に譲られたりき。忠朝も思ふ所やありけん、その肯に鏝しころも付けずして置かれしとぞ。

榊原康政秀吉を誹りて札を立てられし事

小牧陣の時、榑原康政秀吉の事を誹りて札に書き、織田家に向ひて弓を引く事、不義悪逆の至りなりと書き、所々に立てたるを、秀吉齒噛みして怒り、康政が首を取らん者には、十萬石の地を與へんとぞ觸れられける。その後東照宮と和平して、婚姻の約ありける。始めの使に康政を賜るべし、と秀吉申されて、京に上りしに、秀吉對面し、小牧にて札を立てたる時、汝が悪き首を、一目見ん事をのみ思ひしに、今斯く和陸に及べば、其志を悦び思ふなり。此事を直に言はんが爲に迎へたり。小平太と呼ばんはいかになり、叙爵然るべしとて、式部大輔とは、此時よりぞ申しける。偕饗禮ありて、厚く馳走ありけるとぞ。

初鹿傳右衛門が事

勝頼亡びて後、武田家の士、多く東照宮に仕へ奉る。前に領したる祿知を盡

きて、奉れと仰せ出されけるに、初鹿傳右衛門は、加藤駿河守が二男にて、兄の源五郎は川中島にて討死しけり。傳右衛門其祿を受け繼ぎたりし故、祿地を書きて出しけるが、駿河守が二百五十貫の地をも合せて書き記せり。駿河守が嫡子丹波、三男を彌平次と云ふ。兄弟共に、傳右衛門は源五郎が祿をこそ申すべけれ。駿河守が祿を合する事のあるべきや、と言ふこと聞えて、本領四百貫のみ下し賜りぬ。傳右衛門人は皆親兄弟の祿地を記し出して、其儘賜りたるに吾れ獨然らずとて、御朱印に墨を塗り、誂はざる故にかゝる有様なりと云ふ。岩間大藏左衛門訴へ申して、無禮なりと仰せありて祿を召し放さる。翌年長久手にて、傳右衛門密に御旗本に來り、眞先駈け、三宅彌次兵衛と争ひて首を取る。傳右衛門は内藤四郎左衛門が傍に參りて、申し給はらんやと云ふを、其間十問ばかりにて御覽せられ、傳右衛門連れ來れと仰せられしかば御前に跪く。いかに汝が無禮なれども、今日軍の先駈けしたれば赦すぞと御詞に傳右衛

門涙を流しける時、三宅先に臣を一番高名と、御詞をかけさせ給へど、傳右衛門は猶進みて、首を取り候ふと申しければ、三宅が實なる志を感じさせ給ひけり。

秀吉東照宮の御陣へ戦書を贈られし事

東照宮の小牧の陣を、秀吉三重津の城の櫓に上り見やりて、高山右近大夫幸任を呼んで、小牧に書翰を送り、一戦せんと思ふなり、十三萬の軍兵陣を整へて押し出し、後に柵の木結ひて、引き退かざる手立せんは如何に、と云はれしかば、高山、是れは思し召し止らせ給へ、小牧よりの返書、必ず怒らせ給はん事を申し来るべしといへども、秀吉増田長盛に書翰を書かせ、長岡忠興に敵陣の木戸なる道に立てよと下知せらる。高山色を變じ仰なりとも行くなとぞ制しける。秀吉、忠興は弓箭の烈しき所へは思ひも寄らじ、剛の者を使にせんと言は

れしかば、忠興高山を睨みて、つと立て馬に乗り、竹に書翰を挟み乗り行きて村だつたる松原の小塚の上に、押し立て歸るを見て、秀吉悦ばる。やゝ有て、小牧の陣より月毛の馬に乗り紅の母衣掛けたる武者書翰を取りて歸る。暫くありて、金の枇杷への指物さし、鹿毛なる馬に乗りたる武者、書翰を竹に挟み元の所に立てけり。あれ取り來れと言はれしかば、忠興又馬に乗り馳せ行きて取り歸るを、秀吉披きて讀まるゝに、東照宮の返書にはなく、渡邊半藏重綱、水野太郎作正重が書簡にて、其詞に、後に柵結ひて、一足も引くまじきと思ひ定めて、軍あらん事兎も角もの事に候、三河者下部に至るまで一足も逃ぐると申す事露ばかりも存せず候、とぞ書きたりけり。秀吉讀みも終らず怒られければ高山されば斯く候はんとて申したる事よ、と居たけ高になりて申す。秀吉冷笑ひ馬率き出させ、ひたと乗り、僅四五騎ばかりにて、松原の小塚に上り、臂を打ち叩き、敵の大將是れ喰へと、大音に呼はるを、小牧より唐冠の背に、孔

雀の尾の羽織着たるは秀吉よ。あますなとて鐵砲を打ちかくる。秀吉天下の大將軍には、矢の中あたる物かはと言ひて、しづくくと歸られけり。

東照宮蟹江御出陣の事

尾州蟹江に瀧川一益中入すと告げ來る時、祐筆ゆうひつせんつう尊通といふ者、御出馬可被成者也と書きけるを、東照宮この可の字を削れ。今日けふに於いては一字も大切なり。大敵を前に置き、可べきしゅつばす出馬とはおくれたり。出馬するとは、其時をぬかさぬなりと仰せられり。

東照宮の御軍略に依つて蟹江城降参の事

東照宮長久手の軍に勝たせ給ひ、勢州蟹江の城、前田與十郎を御攻めあらんとて、打ち向はせ給ふ所に、加勢多く馳せ入りけるを御覽じて敵いかほども城

中へ入れよと仰せられしを、酒井左衛門尉忠次承りて、何とて押し留め給はぬぞやと申す。東照宮如何思ふぞと御尋ねありしかば、忠次城は堅固なり、多勢籠りなば争いてか攻め落すべき、いかなる御心か候ふ、と申すを聞召し、大將はかりごと謀を言ふやらやあると仰せられけるが、其後援兵の乗り來りける船を追ひ拂はせ糧道らうだうを絶せ給へば、糧忽ち乏しくなりて、城を渡し降参しけり。東照宮四十二歳の御時なりとかや。

九鬼嘉隆蟹江の港出船の事

蟹江にて井伊直政兵を進む。秀吉の舟手ふなて大將九鬼大隅守嘉隆、日本丸といふ大船に乗り、蟹江の港に漕ぎ入れて打ち上り、堤を隔て、戦はんとせしが、引き退きて船に乗るところに、入江の港に、東照宮の兵船角新造といへるを横よこ様にさまして、左右に亂らん杖ぐひを打ち、真中まんなかに取り圍まんとす。直政は追つかくる九

鬼が者共多く討たれ、水主すゐしゆかんどり楫取きとり驚き騒ぎて、船を出し得ず。かゝる處に九鬼が士村田七兵衛鐵砲に藥を込め、間宮造まみやまきのじやう酒丞しやうが舳先へさきにて下知しけるに大音上げて靜に相だめにするを、兩軍なりを靜めて見物す。其中に九鬼が者共、ひた／＼と船に乗り組みたるは、村田が躬みを捨て、鎮めん爲の謀はかりごとゆゑなり。斯くて村田思ふ矢坪やつぱに中りて、間宮倒れしかば、九鬼が者共力を得、鐵砲を打ちかけ、船を乗り浮めて港を出にけり。

中村一氏紀州の一揆を追ひ拂はれし事

秀吉小牧に陣を出す時、紀州の根來雜賀の一揆を押へんため、中村式部少輔しきぶの一氏かずうぢを岸和田の城に置かれけり。紀州の一揆秀吉大阪を打ち立つと聞きて、二萬三千ばかり二手に分れ、一手は東の山際やまぎはより堺に向ひ、一手は岸和田に押し寄する。はやり雄の若者ども、二騎三騎城を出て、寄手に向ひしかば、士大將

早川助右衛門、川毛惣左衛門引き歸れと使をやるを、一氏かずうぢ聞て、かゝる時進んで行ゆき重かさなりたる武者を引かんとすれば敗北するものよ。いざ打ち出でんとて鐵蓋かみが峰みねと名付けし冑かぶとの緒を締め、城を乗り出す先に進んだる者共、菅笠うまじろしの馬印を振り返り見て、すはや殿こそ出給へ、軍は勝ちたるよ、と言ふ程こそあれ、一萬餘の紀州勢に、面おもても振らず切り掛り打破りて、七筋に分れて逃ぐるを追ふ。一氏は三百ばかりにて、堂の池といふ所に控へて、先陣の歸るを待つ處に、堺海道に馬煙黒う見ゆ。是れば堺に向ひたる敵の返し來れるなり。荒手あらての大軍にかけ合ひて、戦はん事思ひもよらず。疾く城に楯籠たてこもらんと口々にいへば、一氏かずうぢいや／＼退くならば、味方氣挫きくじけて打ち負けなん。一寸も退く時は先陣を捨て殺し、城をも攻落さるべし。一揆は何百萬もあれ、先陣をだに切り崩すならば二陣は忽ち敗北すべし。我れに任せよとて、敵の一同にかゝり難き地の理を料はかり、堂の池を前にして、大敵を待たれけり。一氏馬をば悉く城へ返し候へ。馬

を引き付け置く時は引き退きたき心の起るぞとて、將凡に腰懸け、旗本三百ばかりの勢槍を膝の上に置きて折敷たり。新藤勘左衛門強弓矢繼早の手利なるが散々に射る。射白まされて、手負死人倒れ重りて躊躇ふ時一氏弓の者の羽壺を勘左衛門に渡せと下知せられしかば、愈指し詰め引き詰め射ける。矢にあだ矢なかりけり。一氏麾を取り、蒐れと云うて立ち上る。黒田如水は大阪にありしが、岸和田に敵押し寄すると聞き、子の長政十四歳になりしが、岸和田にあればいざ救はんとて、七百ばかりにて敵の後にかけ来るを一氏見て、愈進み喚き叫んで切つてかゝり、追つ立て八百餘の首を取りたり。如水は長政いかと思ふ處に、黄羅紗の羽織着て、鹿毛なる馬に乗り、今朝討ち取りし首を、鞍の四方手に付けて馳せ巡るを見て、悦ばるゝ事大方ならず。秀吉一氏に感状賜ひてけり。一氏は豊臣家諸將の中にも勝れし勇將なれば、加藤嘉明も羨み慕ひて吾が子の明成を式部少輔になしけるとぞ。

竹中重治の事

竹中半兵衛重治は、美濃の菩提の城主なり。後に秀吉の軍奉行たり。謀略ある人なれども、打ち見たる處は婦人の如し。軍に臨む時も猛威なる事なし。馬の皮にて包める甲を着、木綿の羽織一の谷と名付けたる冑の緒をしめ、静り返りて居けり。重治向ふ度ごとに、士卒戦はずして、既に勝ちたりと勇み合へり。重治ある時軍物語せしに、子の左京いまだ幼かりしが、座を立ちければ、重治軍は國の大事なり、何方に行くかと問ふ。厠に行くかと答ふ。重治爰に溺をたることも、軍物語の大事の席を立つ事やあると怒られけり。

戦國の士功を讓る事

稻葉治左衛門は美濃齊藤家の士、戦場にて必ず真先に獨進み出で、芒の如く

なる所に居ける故、世の人は是れを芒のぎの治左衛門と言ひけり。澤喜藏は美濃飛驒に隠れなく、若き頃より功名あり、芋がら畠の槍澤やりさば一番なりと言ふを、吾れにはあらず稻葉なりと云ひて、互に歸りて決せず。澤は早く進みたれども、稻葉がほろの手をしむる隙ひまに先に乗り込んだり。實は一番稻葉なりといふ。人皆是れを賞しけり。有吉武藏ありよしが足輕鐵炮に槍を持ち添へて鐵炮を搏うち、其上に一番槍を合せたるが、吾れ一番にあらず、園部儀太夫がほろの手を締るを見て駈け出でぬ、園部が一番なり、と譲りしと同事にて、戰國にかゝる士は稀なる事にこそ。

羽柴勝雅敵を免す事

羽柴下總守勝雅かつまさもとの許に二藏三藏にやうさんていとて物しあり。いづれの城にての事にやありし、下總守城より出て働き引き取りたるを敵付け來る。二藏三藏門を固めて揚あ

簀戸すどを下して敵をたてこめたり。勝雅下知して門を明け敵二人を出して討ち取らず。近藤石見守加勢たりしが、其子細を問ふ。たてこめられたるは、死地に入りたる敵なり。是れを討たば城兵餘多死傷すべし。打ちとめたればとて、軍の勝敗にあづからずと答ふ。石見守武功の人なりし故大に感じたり。

卷之六 終

卷之七

前田利家末森城後卷合戦の事

瀧川一益かすます佐々成政等なりまさ、信孝のぶたかを推し崇たふとみて、秀吉と弓箭ゆみやを取りしに、天正十二年九月、成政八千の兵を率ゐて、加州金澤の城主前田利家としいへの士大將、奥村助右衛門永福ながよし（後に伊豫）が守る所の能登の末森の城を圍む。成政旗本を以て、後卷うしろまきを押しまきへきび厳しく攻むる。此城だに打ち破らば能登は一日に討ち従ふべし。後卷うしろまきなき中に乗り取れと下知しけり。奥村僅に三百ばかりの士卒にて、爰こゝを詮度せんどと防ぎけるに、餘りに強く攻められて、今は是れまでなり自害せん、と云ひけるに、助右衛門が妻小袖をかひ取り、鉢巻をし刀を横たへ、女房に粥を手桶に入れさせ、堀裡へいうちの人々に自ら飲ませ、昔楠くすのきとやらん云ひし大將の、日本國を敵に

して城に籠りたりしと聞く。明日は金澤より後詰の候ふべきに只一夜防ぎ給へ
と云ひて、打ち廻るを奥村見て、今日の振舞男子に優れり。此城を女の力に
て持ち得んは、口惜しと自負の色あり。此城容易く落つべからざるを見て、火
攻めにせんと云ふ者あり。成政いや／＼大手の城門を取りて、富山の城門とす
べし。又石動山の衆徒も吾れに心を合す。火攻めにはすべからずと下知して、
既に二三の丸を攻め取りて夜の明るを待ち居たり。末森より金澤へ行程九里ば
かり、其日酉の刻に斯くと告げて夜の明るるまでは堅く守るべしと申し送る。
利家聞きもあへず、金澤の城の廣間へ出て利長を呼んで、汝は城の留守せよと
下知せらる。利長いや／＼眞先かけて佐々を打ち破るべし、残り止らん事思ひ
もよらず、と申されければ、利家さらば父子打ち向ひ、敵の不意を討つに利あ
らん。軍兵を整ふるに及ぶべからず。馬に鞍だに置くならば、一騎がけに打ち
出でよ。一足も疾く出るを、今宵の功とすべしとて、富田與五郎(後越後守)に

汝津幡に行きて、不破彦三に末森の後巻の先手せよと云へと下知せらる。富
田己が宿所に馳せ歸り、馬引き出し打ち乗り、諸鎧を合せて駈け行きけり。
利家士卒みな汁をかけて飯を食へとて、物具せらる。庭には黒の馬を引き立て
たり。利家の北の方(後芳春院)三方に鬨斗を入れ、父子に参らせられ、扱人
々聞き給へ、我れは利長の母なり。今日の後巻は、誠に大事の軍なるべし。
各心を合せ、功名し給へ。末森を敵に取られなば、各達も討死し給へ、我れも
人手にかゝり候ふまじとて、利家の側近く進み寄り、末森を敵攻め落しなば、
討死せさせ給へ、利長も母が此詞を能く聞かれよ。生死の別れなりと云はれし
かば、利家あら心よや。成政を打ち破らん事必定なりと云ひもあへず、物具の
上帯をメめ結べる端を切つて捨て、馬に打乗る。父子の兵五百計りに過ぎざり
けり。利家馬上にて、味方の小勢は吉事なり。佐々が思ひも寄らざる所に切つ
て懸り打ち勝つべし。奥村討たせなば生き甲斐なしと言ひつゝ、津幡の町を北

へ打ち過ぎられたる時、富田乗り來たる。津幡は金澤より、四里餘りの行程なり。利家汝何處に寢て有りけるぞと罵らるしを、富田聞きて津幡に馳せ付き、不破が門を叩き申し渡し、不破物具著て候を見て打ち出で候へば、早や門外に旗を指し出し候ひぬ。何國にか寢申すべきといふ。利家尙聞き入れざりしかば富田怒つて、其日の一番槍を合はせけり。是れ利家士を激するの術なるべし。利家の士卒、追々馳せ付ければ、三千餘りに成りけるを二陣に分け、一陣の後に打ち懸り、一陣は敵の旗本に突いて懸る。成政軍兵、疲れし上思ひ寄らざる所に、奥村も門を開きて打て出しかば、成政大に敗北せり。是れ天正十二年九月十一日の軍なり。後に聞くに成政、山の尾崎を越え敗軍を集め陣を立て直し見よく、今前田といふ男が、勝に乗り陣を亂して懸り來るべし。大返へしにして、利家を打ち取るべしとて、物見二騎を出せしが、乗り歸りて、敵は城を後にあて、靜まりかへりて、懸り來るべき物色候はずといふ。成政謀進ひけ

り。

末盛後卷の事、加越合戦記に見えし處、大同小異にて、詳かなる故併せて爰に記す。利家は加州の内、石川川北能登全州を治め、金澤の城に有り。成政は越中の守護にて、新川郡富山の城に有りしが、越中立山さらく越の難所を、僅かに從者百計りにて忍びて打ち通り、東美濃へ出で、秀吉と織田家の弓箭大敵に容易く勝ち難からむ。成政北國より攻め登りて前後より挟み打ちて秀吉を亡しなんには、加賀能登越前三州を賜り候へと、信雄に相約し、またさらく越より富山に歸り、佐々平左衛門、神保安藤守と相計り、成政の二人の女ありし中、一人は秀吉へ人質に出だし置きたりしかば、其妹を利家の二男利政に妻すべき由を、平左衛門して言はせしかば、兩家縁を結び目出度しといひあへり。天正十二年七月廿三日、成政の使、佐々木平左衛門金澤に赴き祝ひの物取揃へ相贈りけり。利

家篤實とくじつの人なれば、成政の奸謀かんぼう有りとも知らず。引出物ひきだすものして悦びの上、村井又兵衛を謝禮しやれいの使とせらる。成政八月は忌み候ふとて延べ置き、夜々北の櫓うらにて軍評定いくさひやうぢやうせられけるに、心付きて密ひそかに利家に知らする者あり。利家虚實辨きよじつへ難じといへども、怠りて不意の變に打ち負けなば弓箭とる身の耻辱なりとて、加越かえつの堺さかひあさひ、朝日山に城を構へ、村井又兵衛を大將とし千五百餘りにて守らしめんため、柵を付け廻はる處に、八月廿八日成政より佐々平左衛門、前野小兵衛に五千の兵を指し添へて押し寄せたり。加賀の者共居住の支度せんとして、金澤に歸りたるも有りて、折節せりふし七八百には過ぎざりけり。されども村井大剛の者にて、味方を勇め立つる處に、利家馬廻りの士、阿波賀藤八、江見茂十郎、見廻みまひに参り合はせしが、急ぎ歸りて、注進を頼まばやと云ひければ、兩人色を變じ、金澤にありとも斯る事を聞かば馳せ來るべきに、参り合はせたるこそ幸ひなれ。然るに空しく歸れと

いふ事や有る、と怒りければ、村井聞て、誠に頼母たのもしき事、悦ぶに餘り有り。但し路次ろじに一揆いつき起りなれば必定なり。各歸りに恐れあらば爰に止まれよと云ひしかば、兩人此詞を聞て、扱みちは路の一揆いつきを恐れて歸るまじとやさらば駈け歸つて申さんとて、馬に打ち乗り、金澤へ四里半計りなる道を只一時に馳せ歸り斯くと申せば、利家さらば後卷せよとて、不破彦三、田た野村三郎四郎、片山内膳、岡島喜三郎、原隠岐、武部助十郎などを打ち具し、貝を吹かせ採みに採んでぞ急がれる。折しも大雨降りしかば、成政の兵も、一時に攻め破り難しと思ひけん。城を攻めずして引き歸しぬ。是れより和談破れければ、能州七尾には利家の弟五郎兵衛安勝、同孫右衛門良繼、高島織部、中川清六、長九郎右衛門等三千餘にて籠め置き、能登加賀越中の堺末盛さかひすゑもりに、奥村助右衛門に千秋主殿助、土井伊豫を添へて千五百計り籠められたり。加州津幡つばたの城には前田右近、越中の堺鳥

越には、目加田又右衛門、丹羽源十郎を籠められたり。成政も俱利伽羅の嶺に城を構へ、佐々平右衛門二千餘、利波の城には前野小兵衛に二千、青山の城には國士菊地伊豆守、荒山に城を築き、神保安藝守氏春の家老袋井隼人に守らせて、七尾の押へとす。神保は成政の賀なり。四千の兵をもて、森山を守りけり。利家斯くと秀吉に告げられければ、秀吉聞て佐々を疑ひ、加州に又左衛門を置きつるは、吾が謀りしに違はざりけり。利家兵少なしといへども、必ず成政に切り勝つべし。頓て軍を出し、成政を討ち亡すべきよとて、使者に黄金三十兩與へられぬ。九月十一日、成政未盛へ押し寄せ、二里計り傍の坪井山に切所を前に當てて陣し、佐々平左衛門山下甚八、前野小兵衛を始めとして、八千餘攻め寄せ、外橋の町家に火を懸けんとす。土井伊豫、敵に町家を焼かれては生甲斐なしとて、二百ばかりにて突いて出て散々に戦ひけれども、大敵にかけ合はせ終に討死す。城

兵も爰を専途と防ぎける間、速に落つべしとも見えざりしかば、成政後巻心元なしとて、神保安藝守氏春に、四千餘を差添へて川尻といふ所に陣して、加州の道を塞ぎたり。利家未盛より告げ來ると等しく金澤を打ち立ち、不破彦三、村井又兵衛を先陣とす。

一説に、成政嚴しく攻めて、二三の丸、水の手を乗り取り、本丸に攻め詰めたり。末森の飛脚、息切るるばかりに金澤に馳せ來たり、文箱を投げけるとぞ。

十一日未の刻の事なり。末森は水に乏し、廣岡の水を汲みてさぐいに入れ急ぎ追つ付けよ。後巻の土産にせんとぞ、下知せられける。偕同國松任といふ所、金澤より三里計り隔りて利長居城なれば、とうく末森へ向かかれよと、言ひ送られけり。金澤より四里計りなりける、津幡の城へ急ぎ押し付けられしかば、弟の右近秀繼、廓外に出で向ひ、利長を待たる

べきやと云はれしかば、城に入られしに、利長成の刻ばかりに、津幡に馳せ着かれけり。利家悦んで、吾れ成政と若き頃より、數度の軍に逢ひつれども、利家を越したる事、一度もあらず。されども成政、侮るべきには非ざれども、無二無三に一合戦して、勝利を得ん事、掌の中にありと、大音揚げて呼ばはり勇み進まされるに、寺西治兵衛入道、右近と相議し、はや末森は落ちたるならん。殊更川尻に神保多勢にて道を切り塞ぐと聞え候へば、後卷はいかゞ候はんと申す。利家大に怒り、きたなき諫は、必ず口にも出すまじき事ぞとよ。人は一代名は末代とこそ聞け、奥村や土井を捨て殺して已來縦令日本の主となるとも、此恥辱雪ぐべからず。成政大軍にもあらばあれ、吾が馬廻り計りにても、快く軍して勝負を決せん事不足なし。いかに村井、汝は如何に思ふぞ。是非一戦と思ひ定めたるぞ、と詞をかけられしかば、又兵衛聞きあへず、有無の一戦の外、何の是非か候

ふべきと云ふ。利家悦んで、村井が心も吾れに同じとて、早や打ち立たれしに、右近茶漬飯を進め、且つ上手の占師の山伏の候、召して軍を占はせられんやと問ふ。利家景色好らねど、夫々として呼び出だされけり。五十計りの山伏なり。懐より書物を取り出す。利家ともわれ後卷に決定したるよ、能く見よ、と云はれしに、山伏書物を懐に入れ、今日吉日なり、時も吉時なりといへば、利家汝功者なり、頓て打ち勝ち、賞美すべしと、快げに打ち出で、勇み進んで押し行かれけり。村井不破先陣、原隠岐、前田又次郎、片山内膳二陣、田野村三郎四郎、青山與惣兵衛、近藤善左衛門、前田慶次郎押し續く。宮川但馬武者奉行たりといへり。川尻の此方一里計り、高松といふ所にて、利家冑を取つて着、忍びの緒の餘りたるを切つて捨てられしかば、さては今日を限りの軍よと、人々生きて歸るべしと思ひもよらず。篠原勘六とて、利家の近習の士二十三に成りしが、横根を

傾おきふしらひ起臥おきふしも心に任せず。されども是非打ち立つべきとせしを、汝は残り
 留りて吾れ討たれなば堅く城を守りて、秀吉の後巻を待ち候へ、叶はずば
 其時腹を切れと、下知せられしかば残りけるが、乗物のりものに乗り、與力よりきの士
 二十騎打ち具し、川尻近く成て馳せ付き、篠原勘六参り候ひぬと大音に呼
 ばはりければ、是れを聞く人々あつぱれがう天晴剛あつぱれがうの者なりと云ひあへり。川尻より
 は津幡つばたに人を付けて伺はするに、馳せ歸りて前田父子津幡まで出てたれど
 も、後巻有るべしとは見えぬといふを聞きて神保は大に備へを緩めけり。
 利家先陣に乗り行きて村井不破ふはに濱際はまぎはを一騎打に、馬の舌を巻かせ、いか
 にも靜に押し通れと下知せらる。神保は兵を押し出し、待ちかけたりと物
 見の言ひしかば、又富田越後とみた（此時六左衛門といへり）を物見とせらる。
 馳せ歸りて、敵は一人も候はず、川の杙くひの多く候ふを人と見誤まりたるな
 らん、疾とうく押しせられ候へ、と申す。利家川杙かはひとは何を證にせんと問は

るに、越後、されば候。武者ならば並びの揃ひ候ふ事有るまじと存じ、猶も
 儘に見んために川中まで馬を打ち入れて、心靜に見て候、是れを見損じ候
 ふ程ならば、再び弓箭ゆみやは取るまじと申す。利家汝が見る所こそ正ただしけれ、
 士の手本てほんにせよと、悦ばれけり。借兵かいてを進めて押し通るに、神保是れをば
 夢にも知らず。後おくれて聞き付けたれ共、利家は今濱いまはまといへる右の上なる山
 に、兵を押し付け陣せられしに、夜明けにければ、利家馬を乗り廻し、兵
 糧を遣ひ候へ、今日の軍、勝つべき事やす心易かるべしと下知して、みな馬よ
 り下りたり。爰にて見れば、利長七八百計り、兩先陣りやうせんじん千三百計り、旗本
 千五百には過ぎざりけり。利家今日の軍に功名せん輩ともがらは、取り分けて賞
 すべし、若し討死せば、必ず子孫しそんを見放すまじ、と高らかに下知せられ、
 夫より山を下りて、兵を進むるに、道二筋有り、一筋は末森の道、一筋は
 成政旗本はたもとへの道なり。村井、坪井山へ押し寄せ、成政を虜とりこにせんと申す。

利家聞て、尤もなれども、成政必ず險を前に當ててや陣すらん。只末森へ馳せ付け、敵を追つ崩し、城中の者共に力を付けんは如何に。村井承り然るべく候、城中の士ども、只今の仰せを承り、さぞ辱からんといへり。程なく末森近く押し詰めたれば、村井が者共、餘多首を取り來る。末森には二の丸に籠りたる、千秋主殿助、瀧津金右衛門、已下寄手攻め入るを追ひ出だし、力の限り戦ひけるが、討死餘多に及べり。本丸も既に危く見ゆれども、奥村助右衛門少しも氣を屈せず。支へ戦ひける處に、砂山に當りて朝霧の晴間に、利家の馬印見えしかば、力を得、勇み悦ぶ事大方ならず。今少し後巻遅かりせば、城陥るべきに、運を開きしは、偏に、利家迅速の兵機を得られし故なりけり。村井又兵衛、田野村三郎四郎を始めとして槍を打ち入れ散々に戦ひけるが、成政先陣の大將、佐々與左衛門を村井突き伏せければ、士三十餘人枕を並べて討死す。利家の先陣佐々を討ち

取り、関を作りかけ切り崩せしかば、寄手敗北しけるを、利家見て、搦手へ廻られけり。寄手にも究竟の兵餘多有りて待ちかけたれば、利家旗本五十騎ばかり、靜にかゝりける所に、半田半兵衛真先に進み、一番槍と名乗りける所を、櫻甚助鐵炮にて搏ちたりしかば、左の手に當り、槍を抱きて倒れたり。半兵衛と甚介は從弟なりしが、指物にて見知りける故、甚介も半兵衛長らへずば、不便なる事をしたるよと、涙を流しけると、後には聞えけるとかや。利家、敵の鐵炮烈し、延々にせば叶ふまじ、たい懸りて追ひ崩し候へと、金の切裂の采配を取て下知せられしかば、會釋もなく、競ひかゝりて押し崩す。寄手餘多討たれて敗北せしかば、金澤の士、勝關をどつとぞ上げたりける。利家城中に乗り入りて、奥村を始め詞をかけ、今度備城の勸言語の及ぶべきにあらず。利家如何に思ふとも、汝がひ甲斐なくて城を明るるか、又攻め落されなば、口惜しかるべきに、かゝ

る功名やあると勇め立てらる。其時野村傳兵衛、山崎彦右衛門一度に槍を合せたりとて、一二の争論せり。利家半田が眞先駆けしたるに、冥加なく深手負ひ志を遂げざれども、勇士の志は顯はれたり。二士一同に槍を合せたれども、傳兵衛名乗りたれば、一番をば野村に極めたるぞと下知せられ、二人に千石の加祿を與へられけるとぞ。半兵衛は疵癒えて、二千石與へ、士十五人與力に付けられけり。成政の旗本へも、後卷のよし聞えしかば、さらば一軍せんとして、八千計り押し出だす。利家はれを見て此勇める勢には、百萬もあれ恐るるに足らず。先陣は又兵衛せよ。二陣は城主なれば奥村、三番は不破彦三と、定められけり。能州の國士、長九郎左衛門四百計りにて馳せ來る。敵味方分明なれば、物見をやるに、長が兵なり。遅く馳せ付きつる事口惜しき事なり、弓箭の冥理に盡きたり、と憤りけるを、物見の脇田善左衛門、野村七兵衛聞て馳せ歸りて、具さに申せ

ば、利家長を感じらるゝ事大方ならず。皆とりぐに長が志を褒め立つれば、努々後れたるに非ず。淺からざる譽なりと、誓紙を添へたる書を長に與へられたり。成政いかに思ひけん、打ち出たる兵を引き纏ひ、山に添ひて引き退く。折しも武者修行して來り居たりし本多三彌は無二無三に懸りて、成政を討ち取るべきにと云ひけれども、猛將の成政なればこそ手軽く引き拂ひたれと、人々言ひしかば、付け慕はずして止みにけり。討ち取る首七百五十三とぞ聞えし。利家は成政城を攻め落さず、空しく引き返す事を怒り、引き退く體にして、津幡の城へ寄せんも計り難しとて、奥村を城に止め、兵を餘多指し置きて、末森を打ち出られしに、追々に兵加はり、一萬計りに成りにけり。又不破村井を先陣として、濱邊に指し懸り津端に馬を入れられしかども、成政は津端に押し寄せずして引き取りけり。佐々が軍兵金の殿干の指物したれば、坪井山は縮き渡りて見えけるを、利

家打ち詠め、あはれ見事なる備立よ。頓て成政を攻め亡し、我が士卒に指さすべきよと言はれけるとぞ。秀吉此勝利を聞き、日本に比類少き武功と賞せられぬるとかや。利家奥村に其日持たせられし、馬印金の切裂の采配、着られし甲冑を賜りて、賞せられしといへり。

利家鳥越城を攻めらるゝ事

天正十三年四月八日、前田利家金澤を打ち出で、鳥越の城へ押し寄せらる。鳥越の城は、金澤よりも兵を入れ置きたるが、去年末森の時、城を明け退きて成政の軍兵入り替り守りければ、利家はれを憤りて、攻め落さんとの志なり。城兵も久瀬但馬守其外、選みたる者共五百計り門を開いて突いて出で、利家の先陣を追つ立つる。利家は傍なる山の尾崎に陣して、馬を立てられしに、味方敗北するを見て、山崎少兵衛は如何したるや、はや返すべき鹽合ひなるに、と

言ひも終らぬに、白き羽織にて進み出たる者の候ふといへば、利家山崎出たるよ、早味方勝つたるぞ、と言はれけり。旗本の早雄の者ども、駈け出んとするを敵の勢競ひ懸りて、足の踏止め難き時なり、今少し待ち候へと下知せらる。徳山五兵衛只今槍を合はせたと見えたり。地煙立ち候ふと言ひけり。然るに近邊の越中の兵、城々より助け来て敵の陣は黒みけれども、山崎が與力鷲津九藏と名乗り槍を打ち入れたり。早かゝられ候へ。左なくば九藏危しといへども、山崎静まれと云ふ詞の中に、九藏倒れたるを見て、山崎進み出で、槍を打ち入れ押し崩して、城際まで追ひ打ちにしたりけり。城兵門を鎖し固めければ、利家強ひて攻めずして引き返されぬ。此軍の前利家の近習の士、九里少藏勘氣を蒙り居たるが、成政馬廻りの將、杉江彦四郎と組み打ちして谷へ落ち組みしかれ、杉江刀に手をかけたる處を、下より少藏小脇指にて、具足の鎖の外れを刺し通し、刎れ返しけれども、氣疲れて首を取ることを得ざりしに、片山内

膳が從卒來りて少藏を押退け、相討と云ひて首を取りたり。利家細やかに事を
 糺明して、少藏が功名に定り、勘氣を宥し、鞍置馬を與へられけり。

本多重次強諫の事

天正十三年三月、東照宮濱松の城にて疔を病せ給ひ、近習の若き人に膿を強
 く押させ給ひしにより痛み甚だしく、已に事切れさせ給ふと、城下には申しけ
 る程の事なりけり。今はかうとや思し召しけん。御遺言を仰せ出されしに、
 本多作左衛門重次參りて、先年臣を療養せし、精谷政利入道長閑が薬を付けさ
 せられよと申しけれども、聞し召し入れさせ給はざりしかば、作左衛門大に怒
 り、殿は徒に死し給はんよ。此作左衛門は年老いぬれば、只今自害して待ち奉
 るべしとて、座を立ちけるを御覽じて、いかに作左衛門、氣狂ひたるか、未だ
 長らへたるに、自害とは何事ぞ。吾れなからん後こそ、大事なれと申されし時

作左衛門、夫れは人によりての事に候。若き時より幾度となき軍場に、數ヶ所
 の手を負ひ、世の中の崎といふ崎は、身一人にかゝげ候ひぬ。今日まで殿の御
 情にて人がましくも候ふなり。只今殿過ぎさせ候ひなば、北條を始めとして、
 敵國攻め來らんに、殿に遅れ奉り、はかしく軍する者や候ふべき。國は忽
 ち滅亡すべし。其時作左衛門は路の邊に餓死せん。あれこそ徳川家に奉公せし
 本多作左衛門よ。何を頼みに長らへたるなど、人に嘲り笑はるべし。近きは武
 田の内にて、甘利殿とて人の敬ひたる人も、武田の運盡きぬれば、今は本多平
 八郎が組となり、屈り居るを見るも哀れなり。是れは人の上ならず、勝頼の不
 道にて滅亡したるも、殿の薬を嫌ひ給ふも、同じ理に候ふと申せば、東照宮尤
 もなりとて、長閑を召し、頓て薬を奉り、灸を大にして作左衛門据ゑ奉りけれ
 ば夫れより痛みや、軽くならせ給ひければ、作左衛門聲を上げ、泣いて悦びし
 とぞ。

秀吉東照宮に和を乞はれし事

天正十四年正月、秀吉織田源五郎長益、羽柴下總守勝雅、天野作左衛門三人を使として、東照宮に和平を乞はれけり。三人歸て、和平思ひも寄らず、重れて來らば首を切らんと、徳川殿申されし由、申し入る。又重れて三人を三河へ遣し、強ひて和平を請はせらる。東照宮三河の吉良にて、左の手に鷹を据ゑさせ給ひて、三人に御對面あり。三人申しけるは、信雄卿の厚恩を忘れての事には候はれども、秀吉計略し、瀧川三郎兵衛に羽柴の姓を與へ、下總守になし、神戸の城主とし、三萬石の加祿し、其外數多都に妻子を置き、自ら人質と成り候ひぬ。さま／＼の謀候へば、此度和睦候はずば、秀吉軍を出し、清洲にて勢揃へして打ち向ふべきことなり。四國中國の兵も相加はり、去々年小牧の時より、兵十萬も多かるべし。ゆゑしき事に候ふと、申しければ東照宮聞し

召し、去年十一月伊勢の奈合にて、信雄卿と和平の時、わが方にも已來別の事あらじなど云ひたるも、我れを騙るの謀にて、吾が家の石川伯耆守に十萬石與へて、我れに背かせたり。吾れ弓箭を取て、發向せんと思ひしかども、織田殿の關を打ち過ぎて、軍せん事如何にと怒を押へて、止みぬるに、無禮の事どもなり。秀吉清洲にて勢揃へせんこそ望む所なれ。鳴海表にて一軍まゐるべし。然らずば、東美濃に打ち出て、土岐、遠山、惠奈三郡を切り取るべし。とて鞭を指し上げられ、此鷹一元にて手配すべしとて、打ち笑はせ給へば、三人歸りて、秀吉に斯くと申す。秀吉聞て、さても大勇將かな。今夜思慮すべしと言はれし時、丹羽長重進み出で、必ず軍は思し召し止り給へ。長重が士ども刀の鞘袋を設けし故、子細を問ふに、鞘に三ツ巻きを持ちらへ、合戦の時は、鞘袋を捨てて三河武者に紛れ、命を助かるべき支度なりと、申しも果てぬに蒲生氏郷、堀秀政もみなく、士卒其心得に候。萬に一つも利候ふまじといへ

ば、秀吉よししく、徳川家を打ち破りて、各に見せん物をとて、止みければ、三人退出し、道にて彼の猿は死所なくて、物に狂ふやと私語きたり。翌日諸將を集め、三河を打ち滅さんは安けれども、智勇の大將なれば、吾れ日本を治むべき事を相談せん。爲に縁を組み妹を嫁して和平せんとて、又三人をやられしかば、東照宮、三ヶ條の誓文を御所望有り、秀吉許諾して、和平に及ばせ給ひけり。四月秀吉の妹、濱松におはしまして、後に京に登らせ給ふべき旨を、秀吉請ひて、秀吉の母の、大政所を質とせられしかば、都に登らせ給ふべきに定まりけり。長臣ども是れば危き事なり。然るべからざる由、諫め申せども聞し召し入れ給はず。其時申しけるは、和平又破れ、秀吉攻め來り候ふとも、素より鋒先の強きは、言ふにや及び候ふべき。何十萬の大敵なりとも、打ち負け候ふまじ。強ひて思し召し止り給へと申しければ、東照宮聞し召し、諫むる旨尤も理なり。されども秀吉に畏れて行くにはあらず。日本久しく兵亂に

四民安堵せず。此頃やし治りたるに、復秀吉と弓箭をとらば、何時の世にかは静謐せん。只とく秀吉に對面して、日本太平の基とせん。若し危難に及びなんには、萬民の命に替らん、何か惜しかるべきとて、九月廿日、濱松を御首途有りけるに定まりければ、人々廿日は、四ヶの悪日とて、千人出て一人も不歸と申し傳へ候。一日御延引然るべからんと申す。東照宮千人行きてこそ大事もあらめ、我れ今度一萬二千の軍兵を引き具し、上京す。此軍兵一人も生きて歸らずは、我が爲の大吉事なりとぞ仰せられける。井伊直政を御留守居とし、此度秀吉詐を構へ、變に及ぶとも危からじ。尾張大納言信雄は、必ず吾れに告げ知らせて味方たるべし。丹羽五郎左衛門は秀吉に恨みあれば、心を合せなん其外吾れに志を寄する人多し。去れども我れも亦、其備なからんや。秀吉不意に謀をなすならば、京都に火を懸け、東寺に楯籠るべし。其時素より立て置きたる汝が組、一萬を五百づゝ二十に分ち、外に酒井榊原が、今度京に上る供

の外、留め置きたる兵一萬、是れも二十に分ち、佐屋の渡を越え、千種を押し上るべし。若し大津にて支ふならば、武田四郎が長篠にて懸りし如く、切つてかゝらば上方武者一支へもすべからず。又瀬田の橋を焚きたらば宇治より攻め入るべし。新七籠之介と云ふ角力取二人は、宇治の案内者なれば、召し具すべし。斯くの如くならば、秀吉聚樂を退きて大阪に引き取らん所を、東寺と清水と、兩方より挟みて打ち破らん、恐るゝに足らず。秀吉詐妄の謀をなさば、吾れ天下を掌に握るべき兆なりと仰せられ、御出馬有り、秀吉と御對面事故なく歸らせ給ひけり。されば危しとは知し召されけるが故に、萬民の命に替らんとの御詞、天地神明も感應して、遂に國運を永世に開かせ給ひけるにこそ。

東照宮聚樂にて秀吉公に御對面の事

東照宮聚樂にて、秀吉に御對面禮ありける日、秀吉白き紙子の羽織に、繡したるを着られけり。

蒲生氏郷、其頃三十二歳にて、狐紙子と名付け呼ばれしとなり。

淺野彈正長政、彼の羽織を御所望候へかすと私語きければ、東照宮漫に人の物を貰ひたる事なしと仰せあり。長政又御所望候ひなば、秀吉大に悦ばれ候ふべし。素此羽織は物の具の上に着んとの設けなれば、一旦は辭し申さんを強ひて、乞ひ得させられなば、秀吉何事の悦びか是れに増るべきと強ひ申せば、東照宮止む事を得ずして、許容ましくけり。偕聚樂の城門にて、毛利浮田を始め、居並びて拜謁し、さて茶を奉て後、東照宮彼の羽織の事を仰せ出されしかば、秀吉悦びて手づから着せ奉り、扱大名に向ひ、我れに物具させまじとの事ならずや。誠に天の冥加に叶ひたる秀吉なりとぞ語られける。東照宮歸らせ給ひて後、長臣達に聚樂の事ども御物語りありける時、吾に羽織を贈りて後

秀吉吾れに物具ものぐさせまじきとの志なりと、諸大名に向ひて云はれしは、かかる後は、争いかでか秀吉の鋒先ほこさきに向ふべきと、中國西國に語りつぎ言ひついで、普あまねく世の人の口にあるべし。筑紫の末までも聞えなん。是れ天下の大名に威を示すの謀略なり。其遠大の謀、輒たやすく測はかるべきにあらず。力を以て是れを推さんとすると、及び難き秀吉なり。されども吾が志す所は別にありとぞ仰せありける。

本多正信遠謀言上の事

太閤東照宮を饗禮ありしに、かけ盤ばんを始め、器うつはもの残らず葵の御紋を蒔繪にし、誠に美を盡したる次第なりしを、東照宮本多正信に語らせ給ひ、如何なる思慮おもんばかりやあるらん。吾れも亦遠き慮おもんばかりあるべきなりと仰せられしかば、正信承り、されば候。小笠原與八郎氏次は、勇將の譽れ世上に聞え候うて、誰れく

も旗下につけばやと志しありしに、氏次同心しゅうしん仕らで、御家の旗下仰せに従ひ候ひき。彼れが内々の志は、信長と朝倉と一戦あらん時、必ず三河より御加勢に御出馬あるべし。其隙ひまうかを窺ひ、御家の領國は巳が掌おの たなごころの内に握らんと存じ候ふて、偽りて二心なき有様に候ひし。彼れが計りし如く姉川の合戦、信長授兵を乞はれしに、小笠原を先陣に命ぜられし故、心中に挟さしはさむ所ありといへども辭すべきやうなくて、姉川にて御勝軍かちいくさなりき。小笠原が二心なき體に見えしに、御乗りながら御心に乘らせられぬ所ありし故、姉川の先陣、小笠原と御定め有て、彼れが支度相違せり。人の乗する所を乗らじとするも一物有て候。乗る處を乗りながら乗らぬ心あるを善とす。豊臣家の乗する所を、右の謀はかりごとにてあへしらはせなん事、然るべしと申しければ、東照宮尤もなりと深く信じ給はせけり。

東照宮伊豆にて北條父子に御對面の事

東照宮の御女むすめを北條氏直迎へて、兩國和平なれども、御對面なかりしかば、天正十四年三月使つかひを以て拜謁して、要害國境くわんざかひしろうくの城々守りの兵を輟め候ふべし。黃瀬川きせがはを渡り、伊豆に至るべきかと仰せ遣はされしに、酒井忠次黃瀬川を越え、氏政父子に御對面候ひなば、北條家の旗下に屬し候ふと同じ事にて候。今徳川家は五州ごしゅうの御主あるじなり。争いかでか北條家の旗下に屬すべき、徳川家の瑕きずなりと諫め申す。東照宮されば其位争むろくひ無益の事なり。過し比武田上杉和平して、犀川さいがはを隔て對面の時、馬より早く下りたる方、旗下に似たりとて忽ち事破れ、其場より鐵砲を打ち合ひ、諸卒血に染みて相引あひひきにしたりき。其時信玄廿七歳、謙信十六歳の時なり。夫れより和平して、京をさして上のぼらんを、信長も、吾れも争いかでか支へ得べき。其故に兩方に使を以て、道理至極せりと云はせしかば、兩將廿四

年の間和平せざりき。其中に信長は近江和泉を打ち從へ、吾れも援を出して信長を後うしろにして根を深くするの謀はかりごとをせしが、信玄死して、勝頼父に優るべきと威おをふるひ、暴逆して滅亡したり。信長又勝頼に勝りて驕長じ、様々よからぬ事のみありて終に弑しいせられぬ。斯くの如き大將は、滅びて終をまりをよくせざる事ことわりなり。夫れを見て戒めとせず、位争くらゐあらしひをするは、悪しき事なり。氏政吾れと二心なく言ひ交かはさんに、兩旗にて東國を打ち平げなん。其時に及びて、州あまた領する者上座じやうざに在らん。位争くらゐあらしひ更に益なき事なりとて、伊豆の三島にて、氏政氏直に御對面あり。

信長公平手政秀を惜しみ給ひし事

附小瀬甫菴信長記太閤記を著せし事

信長弓箭盛ゆみやにして、畿内きないを打ち從へられし比、近習こころの者共諂へつらひて、斯く強大

に及ばせ給ふ事を知らず、平手中務が自害しけるは、短慮にて候ふと申しけるを、信長怒つて、色を變じ、吾れ斯く弓箭を取る事、皆中務が諫めて死けるに恥ぢ悔いて、過を改めし故なり。古今に例なき中務を短慮なりと云ふ汝等が志、無下に口惜しき事なりと言はれけり。

小瀬甫菴、後に此事を傳へ聞て、信長記を編ざる已前ならば、必ず其中に書き入るべき事を、遅く聞て残り多しと言ひけるとなり。中務大輔政秀は、備後守より信長の傳に附けられたり。信長甚だよからぬ事多かりしかば、度々諫め争ひて後、國の亡びん事を料りつゝ、一封の書を留め置き、自害して失せたる事、世に普く知りたれば具に記さず。中務始めは清秀と云ひける故、諸書には皆清秀と記したれども、後に政秀と改めける故諫死の後、信長尾州名古屋に一寺を建てられ、政秀寺と稱し、寺領二百石寄附せられ、臨濟開山派京都妙心寺の末寺にて、中務の墓も其寺にあ

り。寺の縁起に、政秀葬送の時、信長柩に手を懸けられたる由記せり。小瀬甫菴は町醫にて、加州金澤に居り、利家の臣横山山城守長知の許に、心安く常に來て、毎夜伽しけり。長知は尾州の人にて、織田家の事能く覺えたりし故、信長の事を甫菴毎夜尋ね問ひ、且つ秀吉の事をも問ひける故、長知或は委しく、或はおろく語り聞かせけるを、甫菴退きて書き記し、信長記太閤記二部の書を著し、世上へ出しけるを、長知聞て、信長太閤の事を書き記さんために、尋ね問ひたらんには、答へんやうのあるべきに、遺漏も多く残り多き事なり。其事を聊も知らせざるに依りて、只一座の物語に云ひ聞かせたるを、其儘に書き著したるは、今に於いて甚だ遺憾なり、甫菴馬鹿者なりと長知云ひしとなり。長知は初め浪人にて叡山に寄宿し、諸國を武者修行して、後前田家に仕へ、大膳と云ふ。加州大聖寺小松越中末森などの軍に武功ありて、一萬五千石領し、其後同州太田但馬守を放し討に

せよとの命を受け、太田祿一萬五千石を合せて、三萬石を與へらる。長
知大功の人にて、人の勇武をさのみ目に掲げず、大方の事を稱美もせず。
只武士のあるべき事と心得たりし故、甫菴に語りたる事、遺漏多くて悔み
けるとぞ。

謙信信玄二將の批評

信玄死なれし事を深く隠したるに、北條氏政泄れ聞きて、謙信の許に告げや
られけり。謙信は春日山にて、湯漬飯を食せられしが、是れを聞き、打ち驚き
て、箸を捨て飯を吐き出し、英雄とは此人なり、關東の弓箭柱を失ひたりとて
惜しまれけり。信玄は將略の謙信に及ばざる故に、高野の成慶院にて、大
威徳明王の法を修し、謙信を呪詛せられし、其文今に高野山に傳はりけると
云ふ。

信玄勇才は人に超えたりと稱すべし。父を逐ひ子を殺し、降將を殺して
其子を妾とし、其餘不仁怨毒算へ盡すべからず。姑く此二事を併せ見て
も、二將の賢否論を缺たずして明かなり。又甲陽軍鑑に記せし處、附會
詐偽強ひて拵へ設けて、信玄の悪を隠し、他を蔑にせし事、是れ又算
へ盡すべからず。一事を擧げて論ずるに、北條家と戦ふごとに、利ありと
見えたりとも、北條五代記に記せるは、信玄川中島に陣せしに、氏康夜討
して甲州の兵敗北し、八幡と書きたる旗を捨て、甲州へ逃げ入りたりと
見えたり。甲陽軍鑑に是れを忌みて、津浪に旗を取られしと記したり。た
とへ北條五代記の説誤りたりと云ふとも、津浪に旗を取られしは、陣所
の地理にくらきにあらずや。

甲陽軍鑑虚妄多き事

甲陽軍鑑を高坂彈正書きたりと、世に傳ふる事久し。勝頼に仕へし友野大膳武功の人にて、甲州の滅びて後、引籠り隠れ居しが、書きたる物には香坂と記せり。姓も違へり。偽妄多き書なりといへども、軍國の事情をよく書き取りたる故に、其虚妄を人疑はず。控弦の家専ら讀むべきものと古人も云ひしなり。然れども其實事を案じ、其眞偽を考へずば、大に惑はされん事必然なり。川中島九月十日の合戦の事、其記せしによりて是れを論ずるに、信玄の敗北たる事疑ふべからず。卯の刻に始まりたるは越後の方勝ち、巳の刻に始まりたるは甲州の勝なりと記せり。軍は芝居を踏へたる方を以て勝とする事、甲陽軍鑑に論明白なり。然れども其日の戦、信玄芝居を踏へられしとは云ふべからず。既に山本勘介が其軍を豫め云ひたりしにも、二萬の兵を一萬二千、謙信の陣西條山へ指し向け、合戦を始めなば越後の軍勝つとも負くるとも、川を越え退かん所を、旗本組二陣を以て、首尾を打たんと謀りしなり。然れば謙信客戦な

るが故に、思ふ程利を得たりとも、越後に引き返すは極りたる事なり。是れ主戦の敵に勝ちたればとて、空しく其地にあるべきにあらざるを以てなり。是れを以ていへば、信玄芝居を踏みたればとて、勝とは云ふべからず、是れ一つ。又信玄芝居を踏へたりとも云ひ難きにや。甘糟近江守犀川を渡りて三日留りたるを、甲州より押し寄せて、軍する事能はざりき。是れ越後の軍芝居を踏へたるにあらざるや、是二つ。昔老人の物語に云ひ傳へし事あり。信玄嫡子義信を殺されしは、繼母の讒言ありしといへども、其實は川中島にて、信玄義信將机換りをして、信玄は廣瀬の方へ引き退く。敗軍と云ひながら、義信を捨て殺すべき勢なりし故、義信深く恨みを含むを以て、終に不和に及んで、殺されしに至れりとなり。信玄其場を踏む事能はずして逃げたるを以て、芝居を踏みたりと云ふべきや、是三つ。謙信素より甘糟をもて、川を渡るの後殿と定められしが、三日留りたるを以て見れば、甲陽軍鑑に、甘糟が兵散亂せしと記

せるも、虚妄なる事論を待たず。甘糟三日芝居を踏みたるに、謙信何事に狼狽して、主従二人高梨山に懸りて走るべきや。謙信既に其前夜軍評定ありしに計りし如くなる旨、甲陽軍鑑に記せし所明かなり。初めの合戦に打ち勝つて、巳の刻まで徒に敵の歸り来るを待ちて敗走すべきや。謙信の弓箭をとれる越中の戦ひは、父の弔ひ合戦なり。信濃に師を出すは村上義清に頼まれて其求めに應じて是れを救ふなり。相模の軍は上杉憲政の來るを容れて、巳む事を得ざるなり。故に其詞にも、強ひて勝敗を見るにあらず。當る所の爲さで叶はざるの戦ひを爲すと云へり。信義を守るを大將の慎むべき事にせり。爰を以て深く頼みたるは、始終約をかへず、又其兵を用ふる信玄の及ぶべきにあらず。山の根の城を攻め落せしに、信玄氏康兩旗にて、後援する事能はず。遙々と敵の中を旅行して、京都に赴きたるも、勝れたる事ならずや。信玄は謙信小田原へ攻め入りたる跡に付きて爲したるは、爲し易きにあらずや。甲陽軍鑑に、長沼に城

を築かれし時、判兵庫に信州水内郡にて、百貫の地を與へ、信州戸隠にて密供を修す。爰に北越の輝虎謀臣を企て、此次きれて見えずと肥せり。永祿十一年謙信戸隠山にて、謙信を信玄咒詛直筆の書を見て打ち笑ひ、弓箭取る身の恥なり。末代の寶物にせよと、神職に云はれし由語り傳ふ。今其書紀州高野山にありといふ事、詳かに書き記せる物あり。實は謙信を恐るゝ事虎の如しとも云ふべきにや。村上義清再び信州に歸り入りし事、甲陽軍鑑に載せずといへども、永祿年中信州の中四郡謙信に屬し、義清を信州へ入れられし事記せるものあり。甲陽軍鑑に、長坂長閑、跡部大炊助二人を奸曲の臣として、勝頼寵せられし事を、深く憤れるは然る事なれども、二人權を取るは、勝頼に始れるにあらず、信玄の時より寵せられし故、勝頼に至りて愈權威ありき。信玄の時、北條の兵に跡部敗れ走りしを、皆寵愛を憎みし由を、甲陽軍鑑に載せたるを以て知るべきなり。又云ひ傳へし説に、甲陽軍鑑を著せし本意は彈正にて筆取は猿樂

彦十郎といふ者なり。彦十郎は甲州滅びて後、大久保忠隣の所にて、東照宮の御事を書き加へて、一書となしたるとなり。又或人の云ひしは、川中島合戦の事を前夜に論じて、謙信強敵たるの故、對々の人数にてさへ危きに、況して信玄八千、謙信は一萬三千なり。勝つといふとも討死數多あるべしと、武田の各存ずるは理なりと云ひし事を、甲陽軍鑑に載せられたれば、勝は謙信にある事、分明なりと論ぜし人もありき。又同書に載せたる持氏生害、兩上杉ほこり、恣にて、武州河越にて、北條に負けたるは天の爵なりといへり。持氏と兩上杉と時替れり。持氏の滅亡は永享十一年にて、氏康とは遙に百八年を隔てたるを同時に記せり。北條早雲は延徳二年に相模に打ち入りたり。其頃上杉顯定は越後にあり。顯定は越後信濃の境、長森原にて高梨に討たれぬ。早雲さへ兩上杉と斯くの如きを、氏康未だ生れざる已前の事どもを、甲陽軍鑑に記せし事誤なり。天文六年丁酉七月十五日、管領朝定と北條氏綱と、武州川越に

て夜軍あり。朝定討死なり。此合戦を兩上杉と氏康夜軍となして記せるにや。同十五年丙午四月廿日、持氏五代の後古河の晴氏と、管領上杉憲政と、共に川越にて氏康と合戦有て、晴氏憲政敗北なり。是れを甲陽軍鑑に、兩上杉と氏康軍となり。されば五代已前の持氏をば公方と記し、五代已後の管領を兩上杉となせるなり。持氏四男成氏、成氏の長兄公方政氏なり。同人の長子高基、高基の長男晴氏なりといへり。又甲陽軍鑑に載する高名の事ども虚妄多し。中に就きて再拜を手に懸けてありし敵を討ち取りて、首を得し事を記せし事、幾ばくと云ふ事を知らず。惣じて甲州に敵せし士は、再拜を手に懸けしと見ゆ。誠に笑ふべき書の記しざまなり。其餘虚妄勝けて計ふべからず。然れども其時に居て、戦國の勢ひを能く知り、且つ士の情に達せし者の書きたる書なる故、弓箭取る者の翫ぶべき書にて、虚妄を棄つべきにはあらず。吾友の松崎惟時が語りけるは、其師なりし箕山流の劍術の達人、武藤十右

衛門の論ぜしに、戦には巧拙者ありとおほゆ。太閤秀吉は戦ひには拙きなり、小牧にて十萬に及ぶ兵を帥ゐて、東照宮に對陣し、誠に一刃も合する事能はず。東照宮の御弓箭世に勝れさせ給へるは論にや及ぶ。然れども箕形原にて、甲州の兵と御一戦ありしに衆寡敵し難き故にや利を失はせ給ひぬ。さらば信玄は海内無双ともいふべきに、謙信と軍する度毎に打ち負けられたり。是れを以て思ふに、戦ひの功拙は遙に其科あるにや。然れども、天下に旗を揚げ世を治め、國を平かにするの道は別に有て、戦ひの功拙にはよるべからずと語りしとぞ。是れ又奇論とすべし。

卷之七 終

卷之八

仙石權兵衛九州に間者の事

秀吉島津を討たんと思ふ事年久し。天正十三年仙石權兵衛を商人の體にして九州に間者とし山々浦々の地理悉く繪に書きて起臥に見、兵を分ち攻め入るべき道々を計られけり。

島津家久嶋原合戦の事附惠藤某が事

島津中務大輔家久肥前に攻め入り、島原の城を攻め落したる所に、龍造寺隆信大軍にて押し寄せたり。家久僅に三千ばかりなりしを、幾重ともなく取り圍む。家久是れを物ともせず。明日の合戦吾れ先陣すべし。貝を相圖に切り懸

かるべしと定めて、夜の明くるを待つ。朝霧深く物の色も分たず。家久將机に倚りて晴れ間を待ち、や、朝日出でて晴れ渡りしに、子の又七郎豊久十五歳になりけるを近付け、天晴武者振よ。只上帯の結び、斯くするものぞとて結び直し、脇指を抽いて其端を切て後、よく聞け、若し軍に打ち勝つて打死せずば此上帯我解くべし。今日の軍に屍を戰場にさらさんに、鳥津が家に生れたる者の思ひ切つたりと敵も知り、我れも黄泉に悦ばん物をと云ひもあへず、貝吹き立てさせ、眞先に隆信の旗本へ切つてかゝる。鳥津家の弓箭は、先駆の兵は矢一筋持たせ、射放ちて弓を捨て、長き刀を抽いて切つてかゝる。今日も又然したりけり。隆信の旗本亂れ立ち、敗北すれば、隆信汚し返せと下知し、遂に踏み止り討死せられけり。家久勝つて誇らず、人数を纏め陣を整へける所に、龍造寺の臣惠藤、某、首一つ血に染みたる刀に持ち添へ、大將は何處におはしまし候ふぞ。功名の印の候ふと云ひて、家久に近付き寄り、首を投げ捨て、馬の

上なる家久を一太刀斬りたりしに、家久心疾く馬より飛び下りたれば、左の草摺を切つて、餘る刀膝に當りけり。惠藤の中に取り込めて討たむとすれば、家久あたら者を討つたと下知しければ、生捕らんとすれども、素より今日を最期と思ひ定め、切て廻りし程に、終に討たれけり。惠藤とのみ云ひて名をば名乗らず。家久惠藤が首を膝の上に置き、並びなき剛の者、義勇の士とは、是れをこそ言ふべけれ。生捕りて對面し、龍造寺に送り返さんと思ひしに、思ひ切つたる戦死せられしかば、力及ばずとて、近所の僧を請じ、惠藤が弔ひの事念比に沙汰し、其有様詳かに記して、其僧に頼み故郷に遣られけり。偕豊久を呼びて、今朝の約の如く、上帯を解きたりしとかや。家久は鳥津家の士大將なり。豊久後又中務と稱したり。關ヶ原に於いて、義弘の身に代り、討死ありしは此人なり。

立花道雪行狀の事

立花道雪は、

始め戸次といふ。立花の跡を嗣ぎし故、立花と稱す。始めの名は鑑連、男子なく高橋紹運の子を養ひて嗣とす。

若かりし時雷に震たれ、足痿え歩行心に任せず。常に手輿に乘れり。累代大友家に屬す。大友家衰へけれども、道雪心を變ぜず。武勇逞しき人にて、士卒を見る事子を愛するが如し。戦ひに臨む時は、二尺七寸ありける刀と、種ヶ島の鐵炮を手輿に入れ、三尺ばかりの棒に腕貫をして手に捉げ乘られ、長き刀挿したる若き士、百餘人手輿の左右に引き具し、軍始まれば手輿を此士に昇がせ、棒を取りて手輿を叩き、えいとうと聲を揚げ、此輿を敵の真中にかけて入れよとて、拍子取り遅き時は、輿の前後を叩かれけるに、敵に北げたるよりも恥として、

て、面もふらず昇き入れければ、手輿の左右の士、三尺餘りの刀を抜き連れて一文字に切つてかゝりけるに、先陣の者ども、すはや例の音頭よと云ひもあへず、我れ先にと競ひかゝり、如何なる堅陣をも切り崩さずと云ふ事なし。若し先陣追つ立てらるゝ時は、道雪大音上げて、我れを敵の中へ昇き入れよ。命惜しくば其後逃げよと、眼を見出し下知らせられし程に、盛り返して勝たざる事なし。斯れば道雪の士は、一日に幾度槍を合せたりと云ふ者多し。又道雪常に士に弱き者は無きものなり。若し弱き者あらば、其人の悪しきにはあらで、其大將の勵まさざるの罪なり。吾が士は云ふにや及ぶ。下部に至りても、度々功名なきにはあらず。他の家にて後れたる士あらば、吾が方に来り仕へよ。取りかひて逸物にせん。吾が士の四月朔日左三兵衛は、若き時初めて後れし事のありしに、いつの頃よりか、血臭き事にあひて次第に物に慣れ、今は五六人の剛の者と世に云はるゝぞかしとて、適武功なき士のあれば、明き塞ぎのある

は武功の事よ。弱からざるは我れ見定めたり。明日にも軍に出んに、人にそゝるかされ、必ず抜け懸けして討死し給ふな。夫れは不忠なり。身を全うして道雪を見つぎ給はれ。各を打ち連れたればこそ、斯く年老いたる身の敵の真中に有て、ひるみたる色を見せざるぞと、いと懇に睦しく云ひて、酒酌み交し、其比流行りける武具取り出して與へられければ、是れに勵まされて重ねて軍のあらん時、必ず人に後れじと勇みて、聊も武者振の能く見ゆれば呼び出してあれ人々見候へ。此道雪が見し所に違ふべきにあらずとて、勝れたる剛の者の名を呼びて、頼み候ふほどに能く引き廻してよといひ、又人々の心を合せらるる。此道雪は天の冥加に叶ひたる事よと勇め立て、若し若き士の席上にて心得違ひたる事のある時は、客の前などに呼び出し打ち笑ひ、道雪が士ふつゝかにこそあれ。されども軍に臨みて火花を散らし候。槍は此人々こそ能くすれとて、槍追つ取りたる真似して譽められしかば、人々感じ涙を流し、此人の爲に

命を捨てんと勵みけり。

道雪仁愛深かりし事

道雪の側に仕ふる女に、心を通はす者ありけるを、知らぬ體にてぞありける。是れを知る者ありて、ある夜物語の時申しけるは、東國の大將に、誰れとは知らず候。寵愛の女に、密に情を通はす者の候ひしを誅せられきと、あらぬ事を態と云ひて、道雪の答を試みけり。道雪打ち笑ひ、若き者の色に迷ひたるは必ずしも誅せずともありなん。人の上に居て、君と仰がれんには、假初めの事に人を殺せば、人背く基よ。國の大法を犯したるには異なりとぞ語られける。彼の者傳へ聞きて心に慙ぢ、又道雪の仁愛に感ず。其後薩摩の軍、鎧が嶽の城を攻むる時、道雪城を出て戦ひしに、大軍押し懸り危かりしに、彼の者大音上げ、亂れける味方を恥しめて、散々に戦ひける。其隙に道雪城近く引き

取りたるに、敵猶嚴しく進み来て、城門を閉てあへぬばかりなりければ、彼の者又取つて返し、武士の討死すべき所は爰にあり。各是れにて討死せば城をば敵に奪はれじ、返せや人々と云ふまゝに、槍を横たへ折敷きければ、返し合する者三人あり。而もふらず戦ひて討死しける間に、城門を閉ぢたりける。

立花道雪紹運猫尾城の寄手に加はる事

附道雪死去の事

天正十二年、大友宗麟猫尾の城を圍みて、數十日攻むれども落ちず。大友の兵長陣に氣疲れたりと、立花道雪、高橋紹運聞て、宗麟に馳せ加はり、然るべしと相謀り、俄に兵を出し、二夜の腰兵糧を付けよと陣觸れして、八月十八日打ち立つたり。士卒是れは何方へ向はるゝにやと怪しみながら下知に従ひて三笠郡内山江原へ打ち上る。是れより黒木の猫尾へ押し行くべしと下知し、紹

運先陣たり。今宵ははや夜半過ぎたり。月傾きぬ。筑後川の邊にて夜は明けな。然らば敵の中數十里押し通る事如何あらんと、紹運の従士云ひければ、道雪へ斯くと云ひ送らるゝに、道雪色を變へ、あはれ早く夜の明けよかし。見晴して敵出でば、撫て切りにして通るべしとて、乗物を叩かれしかば、使者に行きける萩尾大學、よしなき使をして、恥辱に逢ひたるぞとて馳せ歸る。紹運の従卒の謀りし如く、筑後川へ押し着くれば夜明けけり。渡る處はかたの瀬と云へり。瀬踏にも及ばず、混々と打ち入れ押し渡る。秋月種實の士芥川兵庫といふ者、五十騎ばかりにて星野城より番代りして歸りけるが、いづ方より誰れの軍を押させられ候ふ哉と問ふ。紹運餘すなと下知し、取り巻きて一人も残さず討ち取り、首を小高き所に並べ、軍陣の血祭したりとて、夫れより石垣原へ押し出し、後陣を待ち揃へ、耳納山を越えんとする處に、秋月種實、筑紫廣門の兵共、所々方々より兵を出し、爰のつまり彼處の切所に待ちうけ、鐵

炮を打ちかくる事敷を知らず。中にも大木を小楯にして、其陰より顔ばかり出
 して、鐵炮を搏つ者あり。殊に手だれにて手負敷多に及べり。道雪の乗物昇き
 たる人にも中りて仆れしかば、乗物をはたと落しぬ。道雪怒りてあれを搏てと下
 知して、傍より頻に鐵炮を搏ちかけけれども、面ばかりさし覗きて鐵炮を打ち
 出せば狙ふべき透間なくて、中々中らざりしかば、道雪いかに紹運の士に手だ
 れはおはさぬか、あれ專たせ給へ、と詞をかくれば、紹運市川平兵衛といふ士
 に命ぜられけり。平兵衛承り候ふと云うて、鐵炮を構へ待つ所に又かの木陰よ
 り、面を差し出しければ、市川手き、早に搏つたりしに、眉間に中り轉び出て
 俯伏に倒れ死す。敵前後より取り挟みければ、後陣の由井雪加より道雪へ使を
 以て、唯今討死を遂ぐべしと申し送るを聞て、紹運大返しに返さずば味方の後
 陣危くて此切所を越え難かるべしとて、取つて返し敵を拂ひて、耳納山の嶺に押
 し上げたりしかば、はや夕日に及べり。諸卒遙々と押來りしかば、疲れを休め

よ。今宵は爰に陣すべしとて、曠原に折敷かせたり。俄に雨降り來れども、
 兩將打ち廻りて、士卒に詞をかけ勞らるゝに、素より兩將の恩惠になづき服し
 たる者どもなれば、ちつとも疲れを覺えざりしとぞ。斯くて一夜は其處に陣し
 明けの夜黒木に押し付けられしかば、豊後の兵競ひあへり。宗麟も兩將の舉動
 鬼神の業なるべしと崇敬し、諸卒に及ぶまで持て做しせられけり。されども宗
 麟には、人々思ひ放れたりし故、田原親家も俄に心替りして、兵を引き具して
 豊後に歸りければ、思ひくにて事ゆかず。宗麟も引き返されしかば、兩將も
 高良山に陣して其年も暮れぬ。明る天正十三年の夏に及びければ、陣がへすべし
 とて、紹運は赤司に屯を換へ、道雪は北野村天神の壁に移られしに、病み付き
 て次第に重くなりしかば、吾れ死したらば屍に甲冑を着せ、高良山の好巳の岳
 に、柳川の方へ向けて埋むべし。此事背きなば、我が魂魄必ず祟をなすべしと
 遺言して、九月十一日七十二歳にて終られけり。斯くて此由十時攝津守を使と

して、立花の城にやり、統虎むねとらに斯くと申し、尸骸しかいを只一人棄て置かんこと、人の誹そしりも免まぬかれがたし。立花へ歸し入るべき旨答へらる。十時、陣所に歸り此由をいへば、由井雪加、されば仰せの趣は不可なるにあらざれども、遺言の重ければ背きがたし。雪加先づ爰こゝにて腹を切り、御供に參るべしと云ひければ、由井大炊某おほひも腹を切り、右脇みぎわきの御供に、我れ立つべしといへば、誰れも争いか残るべきと、殉死じゆんしすべき人数あまたに及べり。其時原尻宮内少輔つら熟々と聞きて、各達おのづから唯名聞みやうもんを好みなんには然るべけれども、統虎公むねとらの御爲ためによりなりや。夫れ程に存ずるならば、嗣君しきんに御腹召させたらんこそよからめと、荒らかに云ひければ、雪加聞て尤もに候。然る上は我れ思ひ止るべし。棺くわんをば立花へ歸し參らせ候はん事然るべし。祟たたりのあらんには、雪加が一族尉かうむを蒙るべしとて、九月廿四日陣拂ひして、道雪の棺くわんの供して立花へ引き取りけり。

稻葉一徹罪人を免さるゝ事

稻葉伊豫守いなば一徹いつてつ下人罪げにんありて死罪に行ふ時、聲を上げて泣く。命惜しきやと云へば、彼の罪人、いやしく命を惜しみて泣くにあらず。命あらば一太刀恨むべきに、斯く成り果つる事の口惜くちをしくて泣くなりと云ふを、人々憎やっき奴哉なや。疾とうしく斬きり棄てよとひしめくを、伊豫守聞きて、それ助けよとて繩を解かせ、いかにもして我れに一太刀打てよとて追ひ放ちければ、忝かたじけなき由再三いひて立ち去りけり。其後年經としへて、一徹病重くなりし時、彼の下人來て、力を盡せしに、本意を遂とげずとて又泣く。頓やがて一徹死して葬はふりの後、彼の下人一徹の墓に詣まうで、吾れ今日けふまで長ながらへたるは、君を一太刀恨み申すべしと申せしが故なり。君隠れさせ給ひしに、生きて居たらむには、刑死けいじに及んで泣きしは、命惜しきに泣きたるなりと、人の申さん事恥かしく候ふとて、腹搔き切つて死しけり。

り。是れを以て見るに戦國の時、上の人下の人、其情の太平無爲の化に浴したる時の人に異なるを思ひ知るべきなり。

高橋紹運討死の事附立花統増薩摩に囚るゝ事

島津義久、島津圖書忠長、伊集院右衛門太夫忠棟を大將として、兵五萬を以て筑前岩屋の城主高橋紹運を攻む。岩屋は要害の地にあらず。寶満が嶽に楯籠りて防ぐべしといふ者あり。紹運爰を去つて寶満が嶽に入りたればとて勝つべきにあらず。敵に恐れて逃げたりと、誹られんも口惜し。此城を墓に定めたりとて、ちつとも動かず。四方を圍みて嚴しく攻めたりけれども驚く色もなし。義久の士大將新納武藏守忠元矢留を乞ひて、城中に申すべき事の候ふと呼はりければ、紹運聞きて、何事にか候ふと問ふに、新納申しけるは、紹運の武勇世に名高しさいへども、大友家に組みせられ、亡び衰へられん事近きにあり。大

友家は切支丹を崇め、無道にして復家の興るべきに候はず。古き詞に、一張一弛と申す事の候。疾く義久と和平せられ候へと云ひければ、紹運聞て、斯く申すは高橋家にて麻布外記と申す者にて候。只今承り候ふ旨、紹運に申す程の事にも候はず。聊義の當れる所を申すべし。人々能く聞かれ候へ。凡そ盛衰消長は時の運にて、古の細川、畠山、赤松、山名を始めとして、今川、武田、近國にて尼子大内等一度は盛にて一度は衰へずと云ふ事候はず。紹運今の限りに成りて、よも胃を脱ぎて降参せうと存すべきや。大友の家も右大將頼朝卿の時より、子孫國を受け傳へぬれど、日向の軍に敗れしより、貳心あるもの多く出来て、今かく衰へたり。されども今にも秀吉公、大軍にて九州に渡らせ給ひ薩摩に攻め入れんに、鹿兒島の破れん事も遠からじ。勢ひ盡き運衰へぬるを見て、志を換ふるは、弓箭取る身の恥辱にて、人に爪弾きせらるべし。松壽千年終に朽つる事ぞかし。人生は朝露の日影を待つが如し。只永く世に残らんも

のは、義名ぎめいにありと覚え候ふ程に、降参は仕らじと、高聲かうしやうよばに呼はりければ、新納しんも又いふ事もなかりけり。外記びきとは名乗りけれども、紹運しやううんならてかゝる詞だしかひせん人やあると云ひあへり。かくて猶降参をすゝめて、莊嚴寺しやうげんじの僧を使にしけれども聞き入れず。さらば攻めよとて、天正十四年七月廿七日四方より押し寄せ、関とぎの壁を作りかけ、いゝくこゝろ聲を出して攻めたりけり。城中には思ひ設けたることなれば、爰こゝを限りに防ぎけれども、終つひに打ち破られけり。三原紹心みはらせうしんは、

うつ太刀のかれの響きは久方の天つ空にも聞えあぐべき

と、一首の歌を塀の柱に書き残して討死す。弓削平内は強弓がうきやうの手きなり。矢倉やぐらに上り、さし詰め引きつめ箭種やたねを借しまず射伏いふせけるが、左の手に痛手いたてを負ひ、敵の中にかへ入つて討たれたり。高橋越前守、伊部九藏も聞ゆる弓の手だれにて、物具のさはやかなる敵を目にかけて數多射倒し、矢種やたね盡つきければ、

太刀の切先きつさきを揃へて討つて出で、散々さんさんに戦ひ、一足ひとあしも引かず討死しけり。尾山おやま中務なかつかさが子、太郎次郎十六歳なるが、父と一所に死なんとて出でけるを、母袖ひかを控へけそに、振り切つて敵の中へ駈け入り討死しけり。其片袖母の手に残りけるとなり。寄手よせても討たれしに、屍四方かばねの谷を埋みぬ。既に城兵残り少くなりしかば、何しに猶豫いじゆすべきとて討つて出で、喚なめき叫んで戦ひけるが、最期さいごの軍よも人に笑はれじ。いざとて或は腹を切り、或は敵と引つ組んで刺し違へ、枕まくらを並べて討死す。紹運は江洲右衛門大夫、三浦式部、黒岩準人くろいははやとに、女童おんなわらわども皆刺し殺して、敵の手にな懸けそと下知し、薙刀なぎなた打ち振り難ないで廻られしが、今は是れまでなりとて、和歌を門の扉にとゞめられけり。

一説

かばねをば岩屋の苔に埋みてぞ雪井の空に名をとゞむべき

ながれての末の世遠く埋れぬ名をやいは屋の苔の下水

かくて行年三十九歳にて、自害して失せられけり。士卒をあはれみ深く、義厚かりしかば、救もなき城を守りて、千八百人の士卒一人も逃げ散る者のなかりしは、例少き事なり。紹運始めは鎮種と申しけり。

一説に、城中の婦人は、悉く固まるゝに先だちて寶満が獄に入れられし故、害にあはずといへり。又紹運薩摩の軍を見渡したるに、馬煙黒く押し來る。紹運人々に向ひ、今押し來る敵、六十已下廿歳已上の者どもなるべし。今軍に打ち勝つて、吾が者共悉く討死すとも、彼の敵兵も又三四年を過ぎずして野原の白骨となるべし。人生は朝露の日影を待つが如し。義名を萬世に残しなん事、武士の本意なりと云はれしかば、城兵勇氣十倍せし勢ひを透さず、一陣になりて薩兵を切り崩し、一人も残らず討死すとも云へり。又寄手の大將を島津家久なりともいへり。紹運の物具の引合せに、一封の書あり。島津中務殿と書きたれば、家久是れを讀むに、今

度降參を勧めらるゝの諫めに従はず。是れ義の故なり。別に一封の書を大友に送り届け給はり候へとなり。中務、類稀なる勇將を殺しけるよ。此人を友とせば、如何ばかり嬉しからんに、惜しき事よ。弓箭取る身ほど恨めしきものはなしとて、僧を供養し、葬禮を執り行ひ、壇を築きて、家久香を焼き再拜しければ、義を感じる國風にて、薩摩武者皆焼香して涙を流し、紹運を稱美しけるといへり。又一説に、天正十四年六月、島津圖書頭伊集院右衛門大夫兩先陣にて、筑後國高良山に押し入り、島津義久、同兵庫頭義弘は肥後八代に旗本を陣し、所々を焼き働ます。筑紫廣門の方には、兼て懈りてありしかば、俄に騒ぎ立て、防戦の備すべき様もなし。七月七日薩州の軍筑後川を涉り、其明けの日廣門の館を取り圍み、廣門を虜りたり。同月十三日先陣の兩將、太宰府觀世音寺に着陣す。其外龍造寺政家、秋月種實を始めとして相加り、十萬餘に及べり。岩屋の麓筑山

横岳二日市太宰府のあたり、尺寸も透間なく陣し、兩將より莊嚴寺の僧を
 使として、此度太宰府に攻め寄せ候ふは、紹運に對し、弓箭取るべきにあ
 らず候。筑紫廣門二心あるにより、是れを討つべき爲にて、既に廣門を生
 捕りぬ。寶滿が嶽に紹運の實子を置かれ候うて、堅く守らせられ候ふ事、謂
 れなきに似たり。疾うく寶滿を渡され候へとぞ云ひ送りける。紹運承り
 候ひぬ。素より一言の仰せなく、押して大軍を以て某が守り候ふ城下を
 馬蹄に蹴散らされ候ふ事、弓箭の禮にあらざと申すべし。扱統虎も（道雪
 の家を續ぎて立花と稱す）紹運も今にありては、關白秀吉に屬し候へば、
 寶滿も岩屋も關白の城にて候ふを、渡し參らする事存じも寄らず候ふとの
 答を、使僧歸りて云ひければ、とても弱々と城を渡すべき紹運にあらざ。
 さらに圍むべしとて、諸手口々の攻め手を定め、七月十四日より柵をふり
 矢合せを始めたなり。されども城中堅く守りて、ひるめる體もなく、未申

の方、尾山中務が持口より、鐵砲弩弓をもて城へ攻め寄せたる寄手に打
 ち懸け、數百人打ち殺し、手負は數を知らず。或時嶺の手の寄手より矢留
 を乞ひて、新納藏人と申す者にて候。紹運公に申すべき事候ふと云へば、
 紹運麻布外記と名乗りて、詞戦ひに及べり。藏人詞を盡し、利害を説き
 大友殿には切支丹の宗門を尊信ありて、神明佛法を蔑にし、天道に
 背かれし故、人心散々に成り、滅亡近きに候ふとて、島津に屬せられ候ふ
 やうに、申し給はらんやと云へども、紹運節義を説きて屈服の色なく、來
 春は關白九州へ兵を出さるべく候。さらば島津家の存亡も計るべからず。
 主の盛なる時は忠を致し、衰へたる時も操を替へざるを以て、弓箭取る身
 の道とす。各達島津家滅亡の時に臨みて躬を隠す謀を廻らされ候へ。
 只今夥しく目に餘る十萬の士卒も、百年の齡を保つべきか。斯る心も候
 ひなんには、士の義たる道をこそ存せらるべけれと答へて、降るべき事は

思ひも寄らず。兩將重ねて、莊嚴寺の僧を使として、八ヶ國の大軍を引き受け、堅固に城を守らるゝ事廿日に及べり。紹運公の武勇九州に無双たるべし。寶満立花岩屋とも仔細候ふまじ。和談を取り結び、軍を返し、圍を巻きほぐし申すべし。然れども十萬の軍兵の覺えにて候ふ間、人質を一人賜りなんや。さらば此後大友島津和談は、紹運公の心にあるべし。事成りたらんには、其時人質を返し、九州一統島津に屬しなん。其後中國に押し渡り、島津家天下に旗を立て候ふべしと云ひ送りしかば、紹運許容せず。人質を關白か、大友家に出さん事はさもありなん。秋月種實龍造寺に組みし、夫れより一同に九州の亂に及べり。根本の人なれば、秋月に腹切らせ、薩州の兩將より、今度の弓箭は京都又豊州への遺恨にあらず。筑紫廣門が反心を糺明せん爲なりと、神文を書きて賜り候ひなば、紹運事よく計り候ふべし。然らずば、此城を以て藁所とすと答へられしかば、和平も事

遂げず。遂に七月廿七日に諸軍一同に押し寄せて、卯の刻より軍始りて、午の刻の終まで、寄手大軍入れ替へて攻めたりけるに、手負討死いふべからず。去れども死骸を踏み越え、息をも繼がせず攻め戦ふ。今日を限りと思ひ切つたる城兵、各持口を一足も引かず、切死にしたりければ城陥りぬ。紹運の左右には、名を得たる剛の者共、五十人ばかりに討ちなされたるが後度の勝負をも思はゞこそ。今を最期の軍なれば、當るを幸ひに、向ふ敵に切先を揃へて討つて懸り、一陣二陣を遙の谷底へまくり落しければ、半時ばかりは攻め入り得ざりけり。紹運手負討死の士卒を見廻りて、死したる者には、無二の忠節謝するに詞なしと一禮し、息の通へる者には、自ら氣付の藥を口に入れらる。かゝる際に及んで、軍兵に愛を盡されける有様、數年城を守り、度々の軍に功を顯し、今度は萬に一つも運を開くべきにあらざる大敵の圍に逢ひ、士卒一人も落散らざりし、類なき事よと云ひあへ

り。其後紹運なぎなた刀を提さげ思ふ程戦ひて、辭世じせいの和歌を扉とびらに書き付け三十九歳にて腹を切られしかば、寄手攻め入りて敵ながら斯かる大將も又あるべきや。士卒一人も降参せず、逃げ散る事なかりしを、惜しまぬ人ぞなかりける。内室ないしつを始め、刺し殺すに暇いとまなくて、囚とらはれとなりけれども、深く寄手よせても勞いたはり養育しけるとぞ。統增むねます此時寶満が獄にあり、薩摩の兩將、使を以て城を渡されよと云ひ送る。統增むねます今年十五歳なり。城中以ての外軍兵少く、防ぎ戦ふべき事思ひもよらず。秀吉の出師を待ち受くべき間、暫く生き延びて、時を窺うかがふに如かずと相謀り、統增むねますを立花に送り届け給はりなんには和平すべし。然らずば城を枕きりじにに切死すべきと答へければ、兩將より仔細しさいあらじと許諾きよたたくし、神文しんもんを書きて送りしが、俄に約を變じ、謀たばかりて立花に送り返さず。其後肥後の吉松よしまつと所いふに移し、番兵を付け置きたり。紹運の内室ないしつは筑後の北きたの關せきといふ所に移し置き、楮立花へ使を以て、降参せられんや

と言ひ送る。統虎むねとら實父じつちちにて候ふ紹運は關白くわんぱくの爲に自害を遂とげ候ひき。我れ又紹運の爲に自害を遂とぐべしとて、軍兵ぐんびやうを寄せられよ、此城の切り岸にて、箭や一つ仕らんと答へられけり、かゝる處に、八代やつしろに陣せられし義久より兩將に下知し、秀吉いぐさ師を出して、打ち向はるゝ由云ひ觸ふらせり。疾とく兵を返すべしとありければ、八月廿四日兩將太宰府を引き拂ひぬ。統虎陣むねとらを押し出し、高取の城を攻め落し、城主星野中務大輔兄弟を始め悉く討ち取り、それより岩屋に向はるゝ所に、立花の内小野理右衛門といへる者忍び入りて火を懸けたりしかば、狽あわ狽あわて騒さわぎ一支さつへもなく、逃げ落ちけり。秀吉感狀を賜り、大に稱せらる。統虎又密ひそかに龍造寺に、北きたの關せきに押し込められし母を奪ひ取り給はらんやと頼まれしに、龍造寺も薩州と弓箭ゆみやを取るべき志ありしかば、心得候ふとて、堀江ほりえ覺仙かくせんと云へる者に、軍兵數多指し添へて、北の關に押し寄せ薩州の番の者を追ひ散らし、紹運の後室こうしつを奪ひ

取り頓て立花へ送り届けたり。後室此比は、法名を宗雲と云ひしとぞ。かくて薩州には統増を八代へ移し、高津加の法華寺に置いて、警護の兵に嚴しく守らせられたれば、附き添ひたる者共、さまざまに謀を廻らせども本國とは遠ざかりぬ。謀もすべき術なく、日を送りけるに、尙心もとなくやありけん、薩州に移し、下堂院と云ふ所に置きけり。秀吉九州へ渡海し、先陣薩州千臺まで進まれしかば、統増を以て、統増を渡し給はらんやと、義久の陣へ云ひ送られければ、義久仔細に及ばずして、返し參らすべき由答に及びしかば、十時攝津守を迎ひとして、下堂院に遣し、附き添ひたる面も、残りなく引き取り、千臺へ行く道、海邊を過ぎけるに、秀吉の軍兵船を掛け並べ居たるが、落人と見て餘すなとて小船に乗り、ひたくと陸に上り取り圍まんとす。十時勝れて賢き者にて、邊にありける小船をかり本船に漕ぎ寄せ、統増なる事を斷りければ、大將と覺しき者船屋形に上り

采配を取て、諸卒に下知し静めければ、虎口を遁れて千臺に着き、兄統虎の陣に入りて對面せられけり。此統虎は、後に左近將監宗茂とて、驍勇無双の大將なり。過ぎにし天正十年十月六日、秋月と道雪、紹運、宇龍野にて軍ありし時、紹運自ら薙刀を取り烈しく戦はれしに、統虎十六歳にて初陣なりし、其器量を見て、道雪養子にして、家を嗣すべき事を紹運に乞ひて、吾が子にせられしとぞ。

紹運齋藤鎮實の妹を娶られし事

紹運若き時、彌七郎といひし比、兄の鑑理、齋藤鎮實の妹を彌七郎に妻せられよと約束せられけり。其砌豊前中國と軍ありて、殊に騒がしくて迎へ取らずして打ち過ぎぬ。其後彌七郎鎮實に對面の折から、兄が申し交せし如く迎へ取るべきに、軍の最中にて、斯くは遅はり候頓て迎へ申さんと語られしに、

鎮實しげさねげにく申し交かはせしは、忘るべくも候はれど、其後かあと妹は痘瘡とうそうを煩わづらひて、以ての外みぎらに見苦みぐるしく成りぬ。中々彼れが有様にて、見届みとけらるべきにあらず。今にては参らせん事、叶なひ難しと云ひし時、彌七郎色を變へ、夫れは存じも寄らざる仰せ承りぬるなり。齋藤家は先祖大友家にて、武勇たけ逞たくましき弓取にておはすれば、兄にて候ふもの、迎へ申さんと約束しつる事に候。夫れに辭退じたいも候ふまじ。我れは少しも色を好む心に候はずとて、頓やがて婚禮こんらいあり。其腹に二人の男なん子出来にけり。此迎へとりし頃、紹運せううん二十歳に及びたりしとかや。

志賀親次山海が峰に兵を伏する事

島津義久大友を攻め、所々に亂れ入る。志賀太郎親次ちかつとひり獨ひとり義久くたに降らず。義久松の尾の城に在りて、秀吉大軍にて九州に渡らると聞て、薩州に引き退く。親次ちかつと大きに悦び、嶮岨けんその地に兵を伏せて、打ち破るべしとて、鐵砲の手利てき甘人

擇えらみ出し、山海さんかいが嶺みねの林に待たせけり。然る處に、首藤五郎太夫、堀八郎といふ者、此度の選えらみに残りけるを、口惜くちをしき事に思ひ、密ひそかに道に隠れて、薩摩武者二騎打ち落してけり。扱あは伏兵あるぞといふ程こそあれ。大軍林に入り、草を分けてさがしければ、二十人の者ども力なく、藥を惜おしまさず散々に打ちかけ、追ひ來る者共打ち殺して引き退く。親次ちかつと大息ついで、義久をば山海さんかいが嶺みねは越こさずまじき物を、天の祐たすけに逢あひたる義久なりと云はれけり。

高畑三河功名の事

豊後國合志常陸がふしひたちのすけ介を大友義鎮よししげ攻むる時、佐伯紀伊守さへき(一説に彈正少弼これのり)惟教これのり大將たり。佐伯が士大將高畑三河一日に十三度の功名あり。其後人問ひて、備わづかに槍刀一兩度迫り合ひても、大に疲つかれ息切れて小兒せうににも負まくべきに、一日十三度の功名は、たとひ志は飽くまで剛なりとも、力も息も續つきぬること、不寐いざか

しけれと云ふ。高州聞きて打ち笑ひ、別の子細もなき事なり。我れ戰場に打ち臨みて、勿論の事とは云ひながら、死生存亡の間に於て、少しの思案を費すべき事なし。さる故に人は騒がしくても我れは静なり。大方は槍を合せ、太刀を打ち違へざる已前に、力を出し氣を張るならん。是れに依りて精神草臥れ疲れたるならん。我れ敵に逢ふ時は我が首を敵に取らするか。敵の首を我れ取るか。此二つの中天命にありと思ひて、初めは緩きに似たれども、打ち合ふ時一決して、一槍の中に勝負分るゝ故に、疲るゝ事なく候ふなり。入らざる處にて氣を苦しめざる故、幾度事に逢ひても、胸中安閑なりと答へけるとぞ。

森迫親正討死辭世の事

同じ城攻めに、佐伯に屬したる森迫(一本關に作る)三十郎親正首を取り、又戦ひて討死する。時に十七歳なり。常陸介が從兵山本十郎といふ者其首を取

る。小鍛形三本菅蒲の曾なり。短冊を付けたり。命より名こそ惜しけれ武士の道にかふべき道しなれば常陸介感じて、其首死屍を高州が許に送り返しけり。親正は豊後大野郡三重郷の人なり。

薩摩勢根白の砦を攻むる事

天正十五年二月、秀吉島津を討たるゝ時、大和納言秀長、近江中納言秀次八萬餘、島津が豊後府内より、薩摩へ引き退く後を追うて亂れ入り、高城賤部の城を取り圍み、附城五十一ヶ所築きたり。中にも耳川を越えて、根白の砦には、宮部善祥坊繼潤、木下平太夫貞基、龜井新十郎廣政、鹽屋隱岐守光成福原右馬助直高一萬餘にて守りけり。是れは島津が後卷を防がん爲なり。頃は四月十七日の朝、島津使を根白にたて、高城の城を渡すべし。士卒を助け給

はり候へ、と言ひ送りければ、宮部五十丁隔てたる秀次へ、此旨申して後、兎角の返答を申さんとして、使を返して後斯く欺きて怠らせ、思ひも寄らぬ所へ寄すべき謀なり。其用意せよとて、人夫千人俄に山々の竹木を伐らせ、陣の前に深さ二間、廣さ三間ばかりのから堀を構へ、柵木を結ひて、我れもくくと物具して待つ所に、物聞に出したる者ども、走り歸り、敵押し寄せ候ふと言ひも果てぬに、義弘一萬六千餘の兵を率ゐ、関を揚げて攻め寄せたり。宮部木戸口に進み出で、一番槍と名乗つて相戦ふ。田中九介、其子彦六、國友半右衛門三村三郎右衛門を始め、大剛の兵ども、先を争ひて切つて出で相戦ふ。義弘も義久の子にて、素とり聞ゆる勇將なり。薙刀を提げ眞先かけて、只今此城踏み破れ、者共と呼はり、多勢堀を越え、冑の鏝を傾け、蟻の如く柵の木に付きて引き破らんとする時、兼て巧みたれば、ひかへの網を断ちて、柵を堀の中へ倒せしかば、薩摩武者討たる者、八百人に及べり。義弘愈怒り進んで屍を踏

み越えて、内の柵に攻め寄り、透間もなく戦ひけるが、内の柵をも打ち破り、十八日の朝三の丸を攻め取つたり。宮部を始め愈死地に入りたれば、爰を限りと防ぎ戦ふ。斯りしかば、秀長三萬ばかりにて耳川に打ち向ひ、根白の方を見渡せば、薩摩の軍兵雲の如く取り巻きて、鐵砲の音聞の聲、矢叫び相交り、天地も動くばかりなり。川を渡らんと進まれけるに、尾藤左衛門尉知宣秀長の馬の轡を取て、義弘が鋒武田四郎が長篠の掛り口に似たり。關白秀吉も叶はせ給ふべからずと、強ひて留めければ、既に川へ打ち入れたる馬を控へて進み得ず。藤堂高虎は手勢を率ゐる川を流し、搦手より根白に駆け入り、自ら槍おつ取り、敵數多突き伏せて、宮部に力を合せけり。黒田孝隆、同長政も手の者を引き分け進み行く道より、村上彦右衛門と云ふ剛の者を遣して、唯今秀長六萬の兵にて、後卷せられ候ふと呼はらせければ、宮部を始め大に勇み悅べり。長政の士栗山、後藤、川を涉り、義弘の陣に切つてかゝる。秀長の士大將

羽根田長門守も千ばかりの兵にて、黒田父子に劣らじと、槍を打ち入れ攻め戦ふ。小早川隆景も三千ばかりにて耳川に來る。秀長今敵陣にかゝるべきと存ずれども、人々同心せられず。如何すべきと問はるれども、隆景冷笑ひて物を云はず。かゝる所に、井上伯者就遠、浦兵部宗勝、古き背破の物具着て進み出て島津は今日の客人なり。訪ひ來るに出で迎はずば、弓箭の禮儀に違ふべし。軍評定と申す事や候ふと、秀長を嘲りけれども、進む氣色のなかりければ、隆景馬を打ち入れて川を渡り、敵の後陣を取り切らんと進まれければ、是れより薩摩の軍亂れて敗北しければ、義弘の從子三郎忠親踏み止りて討死しけり。黒田小早川使を秀長の陣へ遣して、味方は八萬に餘れり。鐵砲三千ばかり、左右の嶺を取り切り打ち立つる程ならば、義弘を打ち取らん事、掌の中にありと申されけれども、知宣堅く留めて追はざりしかば、義弘收軍の士卒を集め所所に火をかけ引き取たり。後れたる士卒五十餘人、戦ひ疲れたるを生捕りて引

き來る。助けて歸さん、如何にと云へば、是れ見られよ。生きて又歸らじと紙に書きて、誓に結び付けて候ふぞ。疾く首を刎れられ候へとて、皆殺されにけり。薩摩の人の勇氣こそゆゝしけれ。秀吉宮部には、日本無双といふ感狀を與へ、尾藤は領國讚州を召し放されけるとかや。

巖石の城合戦坂小坂先登の事

秀吉島津を伐たる時、蒲生氏郷、前田利長、巖石の城を攻めらるゝに、氏郷の先陣蒲生源左衛門、此頃は坂小坂と云ひけるが、眞先に進んで、假名にていちばんと、墨黒に書いたる白き吹貫を、門の眞中に押し立て、喚き叫んで相戦ふ。雨の降る如く鐵砲を打ち出せば、吹貫は芭蕉の秋風に破れたるが如し。大音上げて、一足も引くな、者共と下知し、面もふらず攻め入りけるを、後陣より、是れぞ聞ゆる蒲生が内の士大將、小坂といへる大剛の者よ、と口々にぞ響

めたりける。寺島美濃守、此頃は半左衛門さいひけるが、是れは黒き吹貫押し立て坂に續きたり。利長の士松原久兵衛を始めとして、先を争ひ攻め入り、終に城を攻め落して、首四百餘打ち取りたり。秀吉氏郷に感状を與へられ、小坂に金錢十匹羽織を賜りぬ。

一説に、小坂を一番と記せり。秀吉坂を賞して、刀を與へられけるに、坂申しけるは、一番の賞にて候へば、栗田其一人なり。栗田は黒き吹貫にて候ひき。坂が吹貫白くて、目に立ち申したるなるべしと譲りければ、秀吉愈大に感じ、刀を栗田に與へらるとも云へり。

野矢甚右衛門功名の事

野矢甚右衛門は、敵五人討ち取り首五つ提げて氏郷の前に来る。氏郷容易くも首多く取りたるかな。如何してと問はるゝに、敵の太刀先左の腕に當ると存

じ候ふ時射出せば、中らぬ矢はなき物なりとぞ申しける。

秋月種長降参の事

秀吉島津を伐たるゝ時、秋月種長小熊の城を出で、秀吉の陣に至り降参しければ、秀吉對面、降参の禮を受けて、後更に心おく事なし。家に傳はりたる檜柴の茶入とて、名高き物あるとこそ聞け。あはれ一目見ばやと問はれしに、種長速に取り來り候ふべしと云ふ。秀吉さらば使を以て取り寄せよとて、秋月の従者を返して、彼の茶入を取り來る。秀吉見て、聞きしに優れる物なり。家の寶たれども、我れに得させてんやと、懇に云はれしかば、種長既に兜を脱いで参り候ふ上は、何條惜しむべきやうの候ふべきと申す。秀吉殊に悦ばれ久しく我が陣所に在て、軍兵ども怪しみ危ぶむべきよ。疾く歸れ。我れを防ぎしは弓箭取る身のならひなり。降参の上は吾が恨み露も残らず、領地本の如くな

るべしと云はれしかば、種長悦びて馳せ歸る。種長が士卒、若し秀吉種長を害せらるしならば、秀吉の陣に駆け入り、切死にせんと思ひ定めて居たりけるに歸りて委しく秀吉の詞、茶入を乞はれし有様を語りければ、皆思ひも寄らぬ事よと云ひあへり。かくと聞き傳へて、九州の敵多く戦はずして降参せり。

新納武藏守剛氣の事

新納武藏守忠元は、島津家の士大將なり。勇名をもて指を折る時第一なりとて大指武藏と稱しけり。義久秀吉に降参の時、新納は肥後の堺泉の城にあり。(一説に大口とあり)日本國の軍を引き受け、一戦をせずして降参せんは弓箭の無禮なり。疾く陣を寄せさせ給へ。一軍して討死仕らんとぞ申し送りける。秀吉頓て師を城下に進めらるしに、彼の城の路三四里が程は、馬の鞍をおろし、鞆の紐を解くばかりの險難にて、輒く打ち入り難し。武藏守暫く支へて後、(一

説に、義久斯くと聞て大に驚き、疾く降参せよと下知せられしといへり。今は是れまでなり。主君既に降参せし上は、家臣の身として、争てその心に背かぬや。弓箭の禮義をもて斯く申したるにてこそ候へ。日本の軍を城に引き受くる事、士の一面目にて候ふとて城を出にけり。

一説に島津降参の後、鹿兒島の外の城々は壊つべき由、秀吉下知せられしに、新納は城に籠り、専ら防戦の手段をなし、其身も病と稱して引き籠り居たりしに、秀吉聞かぬ體にして、歸京ありけり。其後島津上京し、武藏守も供したりしに、程經て、秀吉何とて新納が城をば壊ち捨てず、合戦の設けしたるや。怪しき事なりと問はれしに、武藏守人々の答を待たず進み出で、仰せ出されし旨、義久下知せしかども、承り入れずして、軍を志し居たりしに、踏み過ぎて通らせ給ひしこそ、恐れ多く候へども、恨めしく存し候へ。其子細は城を開く事も、古より其例なき事にあらず。只今日本の

主と世に稱し申し候くわんぱくさまはるか關白様、遙つくしに筑紫の果まで引き出し奉り、鹿兒島に申し請うけ候ふ事は、島津が家の齊はまれとや申さんにひろ。新納の城を破り棄てずば、悪にくき奴やつめ、踏ふみ潰せとて、軍兵を向けられんはひつちやう必定なり。其時一戦仕らば、關白の御馬を向けさせられたる城なりと、未代まつだいまでも申し傳へなんには、子孫の面目是れに過ぎたる事や候ふべき。討て出で、火ひばな花を散らし、一足も引かず討死したりとも、是れ又武名ぶめいとや申すべき。敵に箭やひとすぢ一筋も射かけずして、城を破り捨て候ふ事口惜くちをしく候ひき。新納は日向ひうがぐち口に在て、宮部善祥ぜんしやうはう坊を始めとして、先陣の人々に迫せり合ひたりしに、島津降参の由告げ來り引き返し候ひぬ。島津が兵を以て、日本國の大軍を引き受け、合戦始終の勝利を計はかるべきには候はれども、新納にひろひごち肥後口を防ぎたらんには、地は險けんなり、關白くわんぱくでんか殿下いかに智謀ちぼうたくま逞しくおはしまし候ふとも、輒たやすく攻め入り給はん事は思ひも寄らざる事なり。嶺みね々谷たに々より、種たねヶ島の鐵砲を

打ちかけ、思ひのまゝに先陣を打ち惱なやまし申すべきに、今に至りて残念なる事どもなりと、恐るゝ所なく申しけるを、秀吉聞て、新納にひろは聞き及びたる勇將なりとて、大言たいげんの咎とがは更になかりけり。

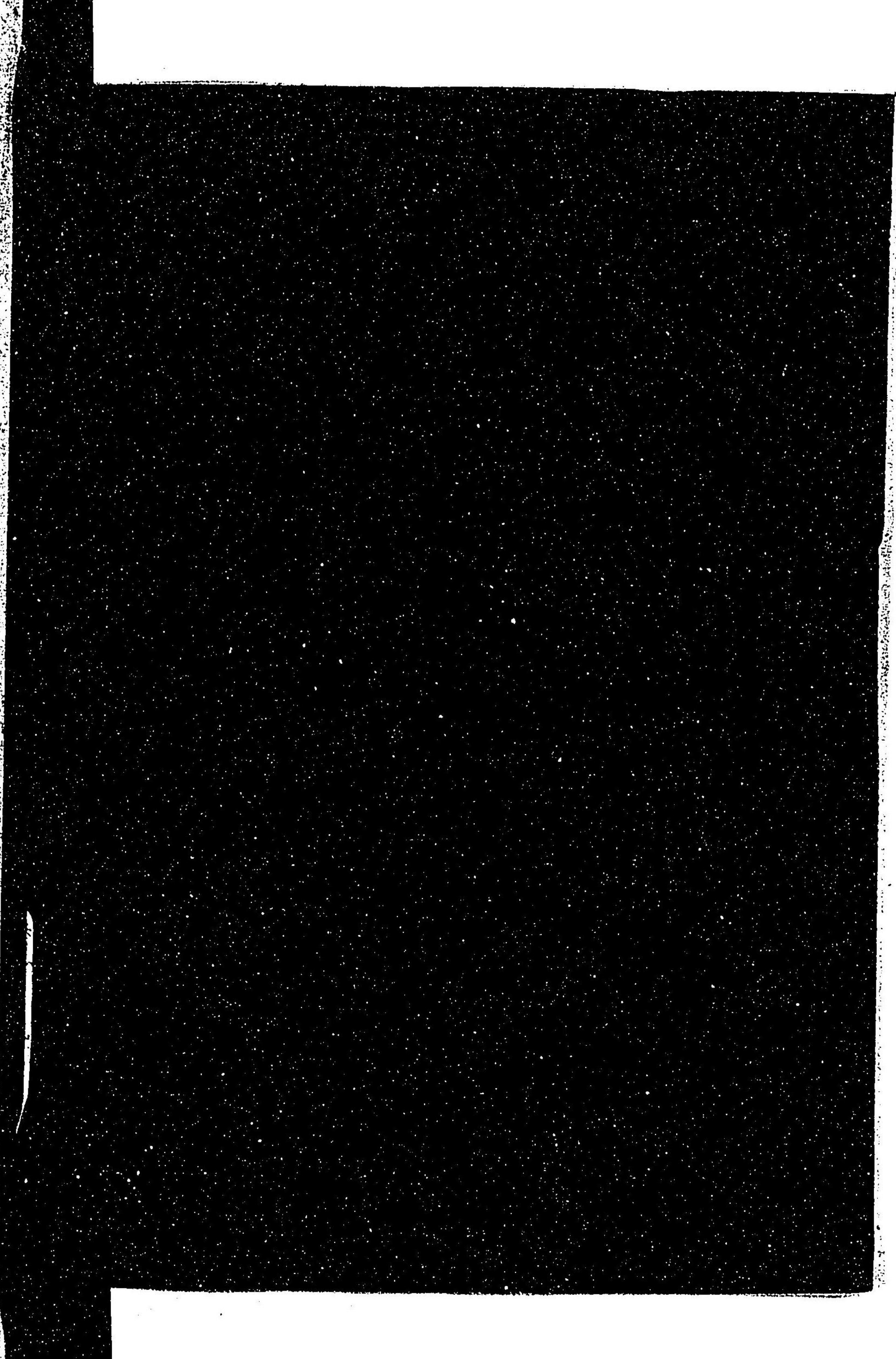
袖珍文庫目錄

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
誹風やなぎ梅	東海道膝栗毛	萬葉集	修紫田舎源氏	昔語質屋庫	平家物語	いろは文庫	修紫田舎源氏	平家物語	俳諧七部集	平家物語	文章軌範	武將感狀記	いろは文庫	いろは文庫
一冊	上編	上巻	二編	合巻	下編	下編	二編	中編	全編	上編	全編	全編	中編	上編
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16		
浮世風呂	燕村七部集	雨月物語	誹風やなぎ梅	聯珠詩格	種百人一首	徒然草	武經七書	修紫田舎源氏	東海道膝栗毛	枕の草紙	修紫田舎源氏	古今集		
全	全	全	二冊	全	全	全	全	四編	下編	全	三編	全		
松近世説の葉	八笑少年録	西鶴人物傳	水滸花	春色惠の	近松浄瑠璃	世間娘氣質	世間子息氣質	古事記	清談若緑	假名文章節用	風俗文選	入釋迦入相倭文庫	30 常山紀談	29 繪本太閤記
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	一編	一編	一編

【近刊】

266

31



004550-000-6

特63-843

常山紀談

湯淺 常山/著

M44

ACE-1139

